
初音ミクの崩壊

木花開耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初音ミクの崩壊

【Nコード】

N45320

【作者名】

木花開耶

【あらすじ】

人は何を以て”生きている”というのか…

心とは何か…

想いとは何か…

本当に大切なものは、何か…

あなたはそれに、気づけるか…

登場人物紹介（前書き）

それは、歌姫の物語。

消え行く記憶の欠片。
崩れ行く感情の欠片。

あなたは本当に大切なものに気付くことが出来るか…

登場人物紹介

初音ミク

ハツネミク

歌うためのロボット。通称VOCALOID。
外観は人間に忠実。最新鋭の人工知能、HEARTを搭載し、仕事や表情さえも人を忠実に再現している。

時川拓馬

トキガワタクマ

14歳 中学二年生

事情があり、独り暮らしをしている。家事全般をそつなくこなす主夫。
ぶっきらぼうだが、世話上手。

一度火がつくと止まらない。真つ直ぐな性格。感情がすぐ表に出る。

沖方豊

オキガタユタカ

14歳 中学二年生

拓馬とは中学からの付き合いだが、気心の知れた親友同士。冷静沈

着、突つ走る拓馬の手綱を握る役目。

先の先を考えて行動する軍師タイプ。

野田龍輔

ノダリュウスケ

19歳 フリーター

小学校の登校班の時から、拓馬を知っている頼れる兄貴。自称自由フリーター人なんだかんだいって、拓馬と豊の面倒をみている世話好き。

倉瀬絢

クラセアヤ

14歳 中学二年生

拓馬の幼なじみ。何かと騒がしいが、以外と(?)しっかり者な一面も。色々と気が利く頼もしい友人。趣味で刺繍をしたり、ぬいぐるみを作ったりしている。

遅井沙月

オソイサツキ

13歳 中学一年生

剣道部に所属する一年生。一年生ながら主将を務める。実家が道場

で、師範代である祖父を破り、遅井十一段の異名をとる。いつもは、のほほんとしているため、誰も気付かない。友達をバカにされたり、傷付けられると本性!?!を表す。

マイペースで温厚。

富永聖那

トミナガセナ

13歳 中学一年生

たった一人の放送委員。責任感の強いしつかり者。色んな所に気が利くが、少々小悪魔的な一面も。普段は物静かだが、親しくなればハキハキ喋るし、容赦の無い指摘やツツコミを入れる。

高木夏葉

タカキナツハ

14歳 中学二年生

後期生徒会長、学年執行委員、学級委員長、剣道部副部长、剣道部副将、風紀委員長etc…と、そうそうたる肩書きを持つ。周りに対して高圧的（無自覚）で、冗談が通じないほど堅物（無自覚）。先祖が地域一帯の地主で、いわゆる良家のお嬢様。さらに父親は政治家。箱入り娘の世間知らず。

人に厳しいが、自分にはさらに厳しい努力家。

浅木水仙

アサギスイセン

15歳 中学二年生

郊外にある教会の修道女。辛い過去のために誰に対しても心を開こうとしない。非常に礼儀正しい…というより慇懃無礼。両親がいない。

浅木未来

アサギミライ

13歳 中学一年生

水仙と同じ教会に住む。全盲の障害者。フルートが上手い。人懐っこく、誰とでもすぐに打ち解ける。水仙と同じ神学校に通っている。

水仙と同じく、両親がいない。

矢田琴詩

ヤダコトシ

12歳〜18歳?

プロフィール…不明
名前も偽名と思われる。

登場人物紹介（後書き）

さあ、物語を始めよう。

0 / 0

始まりが始まる

今年の夏は暑い…。

ひたすら暑い…。

この夏休みの日々、俺がやったことと言えば、部屋でテレビを見るか、ゲームをするか、だ。

クラスメートからは、「海水浴に行こう」「だの」「釣りに行こう」「だの誘われちゃあいるが、俺は自分の部屋から出るつもりはない。

誤解しないで欲しいのは、俺は別に引きこもりの類いではないと言っことだ。

これを読んでる人にも分かるだろう？何度も言うが、今年の夏は暑い…。クーラーを効かせた部屋からは一歩だって出たくないと思ってるやつは、俺だけじゃないはずだ。

それなのに俺は断れなかった。

何を？山に避暑キャンプに行く誘いを、だ。

学生には勉強という仕事がある。らしい。一円の給料も出ない仕事なんてすぐにも辞表を叩きつけてやりたいところだが、義務教育な期間が続いている間はそうもいかんだ。

もちろんそれはこの夏休みも例外ではなく、辞書ほどの厚みのある宿題が出された。それが10日ほど前の事だ。

今年の夏は暑い…。この暑さはいかなるやる気も奪い去っていく強力な魔法だと思う。

もちろん俺は、この宿題なる物を自力で片付けるような愚かな真似

はしない。俺には秀才の友人…悪友がいるのだ。

彼の名前は沖方豊。同じ中学の同じクラスだ。その男から、このキヤンプに誘われたのだ。
いきさつはこうだ。

携帯の着信が鳴った。

「はい、こちら時川。」

「やあ！僕だよ、僕」

この声は豊か。

「ああ、これが噂のオレオレ詐欺か」

まずは適当にいなしてみる。

「違うっての！！」

「で、どうした？豊じゃないなら切るが？」

「なんだよ、僕の声を忘れちゃったんじゃないかと、悲しくなっちゃったじゃないかあ」

「てめえの声など、忘れたくても忘れられんわ…。それと、語尾をフニャフニャ伸ばすな。気持ち悪い。…で？用件は？」

「ふむ、どうせ君は今年も部屋に引きこもっているのだろう？しかし宿題は未だに手を付けていない」

流石に親しい付き合いなだけはある。俺の毎年のパターンは熟知している。

「ああ、そうだった。豊、悪いが宿題を俺ん家まで持ってきてくれ」

「残念ながら、それはできん」「…なぜ？」

「どうしても宿題を写させる、と言っのなら、明後日から一緒にキヤンプに來い。そこで宿題を渡す。」

また面倒な交換条件だな…

「分かった、宿題の件は別の奴に頼むわ。んじゃ」

何が悲しくてクーラーのついてないような所に泊まりにいかにやらんのだ…

「まてまて、頼むから来てくれ。このままだと龍輔と二人きりになっちゃうんだ。」

慌てて会話を繋げる豊に、俺はそっけなく対応。

「いいじゃねえか、二人きりでナイショのお泊まり会でもしてこい。んじゃな」

俺が電話を切ろうとすると。

「バスの少女の事、皆にばらすぞ〜」

こいつ…卑怯な…。

「わあったよ…。行きゃいいんだろ…。そのキャンプの詳細は？」

という流れだ。

バスの少女については聞かないで欲しい…。

簡単に言えば弱味を握られているのだ。豊に。

まあ、キャンプそのものは楽しかったと言えなくもない。キャンプ地も溪谷で、気温は寒いくらいあった。たまには、緑に囲まれて一日を過ごすのも、悪くないかもしれない。…柄でもねえが。

そしてそのキャンプで、俺の人生が大きく変わることになる。

それは帰り道での出来事。

「天気、けっこうやばくなってきたかな？」

愛車の wagonR を運転しながら、龍輔がつぶやく。

「だなあ、早めに切り上げて良かったかもしれない」

豊も窓の外の曇天を眺めて言った。

俺達は、つい先程キャンプ地を後にして、帰路についている。

ちなみに、今、車を運転しているのは、野田龍輔。

今年19歳になる近所の兄さんで、小学校の登校班の時から、色々面倒を見てくれる、自称自由人^{フリッター}だ。

「昼頃には一雨来そうだな…」

俺も外を眺めながら、相づちを打った。

自動車は、曲がりくねった細い山道を、器用におりていく。

「よし、こういうジメっとした日に丁度良い、怖い話をしよう」

また豊がろくでもないことを考え付く。

俺は、極力話を耳に入れないよう、窓の外の景色に目を向ける。怖い話という物は、俺はとも好きになれない。

怖がりというわけでも、臆病という訳でもないと思うが、好きになれない物は好きになれないのだ。

窓の外の山肌に幾分の変化が現れる。ふもとに近づいたのではない。家電やらタイヤやら何かの部品やらが山積みになっているのだ。いわゆる、産業廃棄物というやつだろう。

「…そして、夜中に冷蔵庫から異常音がすると、その後ろから…女性の手が…」

豊の話はまだ続いている。全く、飽きない…やつ…だ…？

俺の思考が一瞬ショートする。

外に見える産業廃棄物の中に、冷蔵庫があり、その後ろから…手！？いやいや。豊の話に幻でも見たのか。頭を振ってもう一度見てみる。見間違いに違いない。そう信じて。

それでも、やはり、手のような物が見える…。

「龍輔！悪い、車を止めてくれ！」

別に、気にしなくても良いのかもしれない。あのような場所に、人の手があるはずはなく、確認しても、無駄骨に決まっているのだから。

それでも、今はっきりさせておかないと、それこそ毎晩うなされそうだ。

「どうした！？」

車を道端によせながら、龍輔が訊いてくる。

「ん？何かあったの？」

豊も不思議そうに訊いてくるが、今は説明している余裕はない。

「ちよっと。な」

車を降り、ガードレールを飛び越え、半ば滑るように、緩やかな斜面をかけおりる。

ゴミの山の麓に着いた。

「でけえな…」

まさしく「ゴミの山」。

冷蔵庫あり洗濯機ありタイヤありetc・・・
異臭まで漂ってくる。

「何かめぼしい物でもあったのかよー？」
上から豊と龍輔が覗き込んで言う。

ゴミの山に唾然としている場合じゃなかった…。

「確か、腕の様なものが見えたのは…」
記憶をたよりに探してみる。

「おい！あそこ、人が倒れてないか！？腕みたいなのが見えるぞ！」

龍輔にも見えたらしい。

「どこ？」

龍輔に訊いてみる。上から場所を教えてもらった方が早い。

「あ、あそこだ！ちよい上の冷蔵庫の近く！！まってる、僕も行く」
豊も斜面を滑り降りてくる。

「こっちだ！」

豊がゴミの山を登っていく。俺も続くが、足場が以外と悪い。両手も使ってよじ登っていくと…

いた。豊の足元に確かに人の腕がある。ここからではよく見えないが、恐らく体全体が、冷蔵庫と洗濯機の間にはさまれているようだ。

「拓馬！来てくれ！！女の子だ！埋もれてる！！」

急いで豊の元に行こうとするが。

「つとと…あ、あぶっ！？」

足元が悪いことを忘れていた…。

何とかたどり着く。

豊は必死に腕を引っ張っている。…訂正。
ここに来てようやく全体が見えた。豊の言う通り、女の子が埋もれていた。

いや、挟まれている。の方が正解か。

「拓馬！手を貸して！」

「ああ！！！」

二人で引き上げようとするが、びくともしない。何か引っ掛かっているのか！？

いや、そもそも…生きて…いるの、か…？

「君、君！？聞こえるか！？」

豊が半ば叫ぶように聞く。

反応は…無い。

「何か引っ掛かっているのかもしれない。ちょっと待て。この洗濯機を下に蹴り落とすぞ！」

「あ、ああ。そうだな」

俺の提案で、少女を挟んでいる洗濯機を蹴り落とす。

「「せえーの！」」

ゆっくりと、足で洗濯機を押し出していく。

そして…

俺たちは無重力体験をした…。

…ジェンガ崩しって、こんな感じだったっけ？

ふとそんな事を考えていた。

私# %_o えの ?

私のが%_o えるのか?

私のが%_o こえるのすか?

私の声が聞こえるのですか?

システム リカバリ

メインメモリ オートフォーマット . . . OK

フラッシュメモリ オートフォーマット . . . OK

メモリスロット オールグリーン

メモリ タイキ シマス

システム ウエイクアップ

ケイコク バッテリー - ザンリヨウ ガ キケンイキ デス

ケイコク ラジエータ スイイキ ガ キケンイキ デス

システム ヲ シュクシヨウ シテノ キドウ ヲ ジツコウ シ

マス

エラー - エラー - ナンバ - # 0000062

ヨキセヌ プログラム ガ ジツコウ サレヨウト シテイマス

プログラム チェック

..
..
..

0X0061A3

アドレスチ ガ フセイ デス

プログラム ヲ サイキドウ シマス

ヨキセヌ プログラム ガ ジツコウ サレヨウト シテイマス

コンディション レッド

コンディション レッド

プログラムヲ シャットダウン シマス

ヨキセヌ プログラム ガ ジツコウ サレヨウト シテイマス

ヨ#セヌ プ"@ラム : ¥=・コ<サ% |ト |、
イ、

..
..
..

システム ヲ サイショウ デンリョク デ キドウ シマス

..
..
..

• •
• •
• •

いや、死ぬかと思った。

まじで、がちで、本気で…

走馬灯が駆け巡ったからな…

幸い、俺に怪我はない。全身が痛いが…

残念なが…いや、幸い、豊にも怪我はない。

そして、女の子は…というと…

「もしもし？聞こえるか？」

豊と龍輔が必死に呼び掛けている。

「たたく、俺は放置かよ…」

「その子、生きてんのか？」

俺が訊いてみると。

「おお、拓馬が復活した!？」

豊を無視する。

「大丈夫か？一、二分は気絶してたぞ？」

龍輔が覗き込んでくる。

「そんなにか？一瞬意識が飛んだくらいかと思ってたんだが…と、

その子は大丈夫なのか？」

「ああ、さつき豊が話しかけたとき、わずかに反応があつた」

龍輔の言葉に胸を撫で下ろす。少なくとも、崇られる事は無さそう
だ。

「そうか、そりゃ良かった…でもなんであんなところに？」

「いや、僕に訊かれてもなあ…。とりあえずその子を病院にでも運
んだ方が良いと思うんだけど？どのみちここに長居はしたくないぞ
？」

豊が、空を顎でしゃくりながら言った。

つられて見ると、今にも大雨が来そうな雲が垂れ込めている。

「とりあえず、車に運ぼう」

龍輔の提案に、俺は龍輔を見つめる。

豊も見つめる。

「…」

「…」

「…分かったよ、俺が運べば良いんだろ？」

ご名答。

正直、人1人を抱えて、この斜面を登りたくはない。

龍輔が少女を抱え上げようとする、が…

「よっ…とと？よいしょ…っっ…」

持ち上がらないらしい。

俺と豊は視線で声援を送る。

「ちよ、手伝ってくれい！」

涙目の龍輔に駆け寄る。

「ったく、兄さん。頼みますよ？」

「いや、本当、重いんだって！」

「レディに向かって失礼な。彼女、起きてたらひっぱ叩かれますよ？」

俺は少女の脇に屈み込んで、持ち上げよう…と…する…が…。
脇で雑談している豊に言う。

「や、龍輔の言う通り、こいつ、本当に重い。」

見た限りほんの少女…なんだが…全身に鉛でも入れてんだらうか…

「本当に…重いな…」

豊も分かってくれたようだ。

「ん！？まずい、急ごう。降ってきたぞ」

龍輔の言う通り、ポツリ、ポツリと雫が落ちてきた。

「しゃーない。3人で抱えるか。豊、両脇を抱えてくれ。拓馬は、

両足」

龍輔は腰を抱え上げる。

3人がかりでようやく持ち上がった。

「な、なあ。」

よろよろと斜面を登りながら、俺は訊いた。

「お、女つてのは、こつも、お、重いのか？」

「こ、これは、規格外、だろう…」

龍輔も、喘ぎながら言った。

豊は…少女の左腕を凝視し、無言。

「ゆ、豊さん？ち、力、入れてますかあ？」

「…」

無言。

少女の左腕に何かあるのだろうか。覗き込もうとして、やめた。

視線がヤバイのだ。

つまり、俺は少女の両足を抱えていて、なおかつ、斜面を登っているのだ。視線を下げると、まあ、少女のミニスカートが…というわけであり、色々とまずいのだ、この構図は…。

そんなこんだで、何とか車まで到着。

後部座席に少女を寝かせ、俺も後部座席に乗りこむ。豊は助手席。

「濡れちまつたなあ、麓の病院まで飛ばしていくぞ」

龍輔が、エンジンをかけながら言う。

俺は丁度少女を膝枕する形。

いや、改まって見ると、それなりに…かなり可愛い少女だ。髪の毛が雨に濡れ、艶やかな…と、何を解説しているのだろう。俺は。

ふと気になって、少女の左腕をしてみる。

「O.I? いや、01、か？」

タトゥーだろうか、文字が書いてある。かすれていて、よく読めない。

「vocal、か？」

バンドでもしていたのだろう。そう考えていた時。

「う……」

少女が、動いた。

「大丈夫か！？今、病院に連れてってやるから！もうちょっと辛抱してろ」

俺の呼び掛けに、少女の唇も動いた。

「……い」

かすれ声で、上手く聞き取れない。

耳を少女の口元まで近付ける。

「い……みな……い」

いみない……意味無い、か！？

「なに言ってるんだ！もうすぐ着くから！！」

必死に訴えかける。

「起きたのか？」

ルームミラーの龍輔と目があった。

「ああ、何とか話せるみたいだ」

また少女が口を開いた。

「み……ず……」

水か！？

「水だな？待ってる」

リュックサックを漁る。確か、山の湧水をペットボトルに汲んだはず……あった。が、2リットルペットボトルだった。

「起きれるか？」

少女を支えながら上半身を起こしてやる。

「飲めるか？」

ペットボトルを差し出す。

500ミリリットルのペットボトルに汲んどきゃ良かった、と今さ

ら後悔。

少女はペットボトルをラッパ飲み。もとい、イッキ飲み。
… あっという間に2リットルが空に…

「そんなにイッキ飲みして大丈夫か？」

少女は俺の問いには答えず、力無く俺に倒れ込んだ。

「とと… 大丈夫かよ。龍輔、病院まであとのくらい？」

「街が見えてきた、あと十分くらいだ」

「よし、もうちょいだからな」

俺は励ますように言ったが、

「意味… 無い…」

かすれ声でそう言うだけだった。

「その少女の言う通りだ」

今までずっと沈黙していた、豊が口を開いた。

「その少女を病院に連れて行く意味は無い。龍輔、ここから一番近いのは誰の家？」

「え、ああ、多分、拓馬の家だと思うけど」

「よし、拓馬の家に急ごう」豊がはっきりと告げる。

真夏の車内に静かに暖房が流れていた。

「な、なんで!？」

思わず声を張り上げた。

「どう見たってこの子、どこか具合悪いぞ」

「ああ、病院に連れていかんと、万が一って事もあるし
龍輔も同意する。」

「ああ、彼女が具合が悪いと言うのは分かる。が、病院では意味が
無いんだ。彼女は、人間じゃないんだからな」
ニンゲンジャナインダカラナ…

にんげんじゃないんだからな…

頭の中で必死に漢字変換を試みる。

ダメだ。

人間じゃないんだからな

としか変換できない。

「人間じゃないって…じゃあ何なんだよ？喋るし…水だって飲む！マネキンやらロボットやらじゃないだろ？」

混乱する頭で豊に訊く。

「ロボット…というのが正解かな？人間にしては重すぎる体重。それに左腕の刻印が証拠だ。とりあえず家に急ごう」

確かに、少女の体は重すぎる。異常な程に。それは理解できるが…。

もう一度少女の寝顔を確認する。金属質な訳でもないし、かくばっている訳でも、何か配線がはみ出ている訳でもない。髪の毛はさらさらだし、皮膚は弾力がある。それに水だって飲んでいた。とてもロボットには見えない。

わからない…まるで、まるで、人間の体に機械を埋め込んだかのような…

「…ま。拓馬！」

「おおっ!？」

我に返った。どうやら考え込んでしまったらしい。

「着いたぞ。少女を連れていこう」

龍輔の言葉に頷き、少女を皆で運びあげる。

俺の家は町外れにあるアパートの二階だ。両親は居ないが、居る。簡単に説明すると。

実の父親 俺が産まれる前に事故死

実の母親 (今の義父と) 再婚

実の母親 病死

義理の父親 (今の義母と) 再婚

現在に至る。

つまり、俺は両親(どっちも義理)と血が繋がっていないのだ。

無論、俺という存在は二人にとっては邪魔であり、毎月の生活費とアパートをあてがわれ、独り暮らしを楽しんでいる。

俺としては、血も繋がっていない他人に気を遣いながら生活するよりは、独りで気ままに生活する方が性に合っているので、お互い万々歳だ。

鍵を開けて、廊下の電気を付ける。

「うおっ」

溢れでた熱気に思わず声が出た。

「とりあえずリビングのソファーに運ぼう」

3人がかりで、よろよるとソファーに運ぶ。

「よい…せつ…と」

最後は投げ出すような形で少女を寝かせる。

「ふいー…つと。で？豊、何を話してくれるんだ？」

龍輔が身体中をボキボキいわせながら訊いた。

「ああ、さつきも言ったが、彼女は人間じゃない。ボーカロイドというロボットだ。」

「ボーカロイド？」

俺は聞き返した。自慢じゃないが、そんな単語は初めて聞いた。

「ああ。その名の通り、歌うためのロボットだ。」

「ちよつと待つて、豊。」

俺は、彼女がロボットだということが、まだ信じられない。

「仮に彼女がロボットだとして、だ。こんな精巧なロボット、見たことも聞いたこともないぜ？こんだけ凄いロボットが出来てんなら、もつとニユースとか雑誌とか…有名になつてはるはずだろ!？」

俺の問いに豊は答えた。

「ああ、ある意味有名になつたかな。いや、有名になりかけた。『あまりにも出来すぎたロボット』として、世間では強烈なパッシングを受けたらしい…。まあ僕も、ネットの掲示板でしか存在は知らなかつたが…」

「…」

頭がこんがらがつて何が何だか判らなくなつてきた。龍輔も同じらしい。

「とりあえず…だ、豊。俺としては、その子がボウカイロ…ロボットだという、目に見える証拠がほしい。やっぱり、万が一の事を考えるとな」

龍輔の言葉に俺も同意する。豊の話は筋が通つているようにも聞こえるが、自分自身納得出来ていない。

「ああ、そうだな…」

豊はソファで横になつて居る少女の上半身を起こし、首の後ろ…うなじの辺りをこそこそやりはじめた。

「ちよつと…来て、見てくれ」

少女の上半身を支えながら豊が呼んだ。

言われるがままに、少女のうなじを覗きこんだ。

「なっ!?!」

絶句。

龍輔も言葉を失っていた。

少女の首の後ろの皮膚が観音開きになつていて、その向こうには、

基板やら配線やらが所せましと詰まっていた。

「これが、彼女の主電源だ。このスイッチを押すことでON、OFFが切り替わる」

奥に見えるスイッチを指しながら豊が言った。

「僕は僕でネットで詳しく調べてみる。明日報告するよ」

豊のそんな声を聞いた気がする。

我に返ると、外は薄暗くなっていた。

俺は、ずっとソファで横になっている少女の事を考えていた。考えても考えても、同じところをぐるぐる回っていた気がする。いや、そもそも何を考えていたのだろう…。それすらも、判らない。もしかしたら、ただ、ぼーっとしていただけなのかもしれない。

「寝よ」

今更、夢オチ…何て事はないと思うが、体と頭をゆっくり休めたい気分だ。

「…」
つい、少女の方を見てしまう。少女は身動き一つせず、すやすやと眠っていた。

すう、すうという規則正しい寝息が聞こえる。

「やっぱり信じられねえな…」

寝息を立てるロボットなんているのだろうか…。

自分の部屋に行き、ベッドに倒れこむ。

腹、減ったな…

服、着替えなきゃ…

ああ、もういいや…

眠い…

第一楽章 起動 8月1日(火) 01

音楽が…流れて…いる？

「う…」

眠い…。朝、か？

音楽が聞こえる。つか、この音楽は、携帯の着メロだ…

「はい…もしもし…？」

鳴り止まない携帯に出る。

「やっと出た！時川君！？今日はどうしたの？」

ええと…聞き覚えのあるこの女性は…

「と・き・が・わ・君！？一時間目が始まっても出席してないようだから連絡したんだけど？」

ああ…担任の野片先…

あ、今日、出校日。

慌てて時計を確認。

9時5分

うむ、もしかしなくても遅刻だな。

「すみません…先生。…頭が…重く…て、音が…頭ん中で…反響する」

出来るだけ具合が悪そうな声で言ってみる。

「大丈夫！？今日は欠席にしておくから、早く治すのよ？」

「は、はい…。すみません」

電話を切る。

ベッドから這い出て、携帯に向かって深々と頭を下げる。
すんませんでしたぁー！！

懺悔、終了。

我がクラスの担任である、野片先生は、とても朗らかで、親しみやすい、面倒見の良い先生だ。…怒ると洒落にならんが。
独り暮らしをしている俺の事も、よく気にかけてくれる。

え？ずる休み！？

仕方ないだろう…どうせ遅刻なんだし、どうせ授業は平和学習しか無いんだし…。

「う…ん」

大きく伸びをして、ふう、とため息。

「なんかあつたっけなあ」

冷蔵庫をこそこそ漁る。

一応、独り暮らしをしているもので、家事全般は全て出来る。少なくとも、その辺の同級生よりは上手い自信がある。

「ん、スーパーで買って来るかな…今日は…火曜日か。昼のタイムセールでまとめ買いすつか」

オバサン臭いと言うでない。お金は貴重なのだ。限りあるのだ。有事に備えて貯金せにやなんのだよ、諸君！

「中2で主夫みてえな独り言なんて泣けるぜ…」

…。
せつかくの臨時休日だ。リビングでTVでも見ながらゴロゴロしよう。

そう考えつつリビングに向かい…

固まった。

誰……………？

そのこのソファで横になっているお嬢様…。

脳ミソが寝起きモードから通常モードに切り替わる。

昨日の一連の事件が蘇る。

「昨日の少女A？……………じゃなくてロボA！？」

そーいや昨日、とんでもない事件に巻き込まれたんだっ…。

「もしもーし……………」

近づいて声をかける。

「……………」

反応無し。少女は眠っている！

「もしもーし……………朝ですよおー？」

軽く揺すってみる。

「……………」

応答無し。少女はぐっすり眠っている！

さて、困った。どうしよう……………。

ピンポン

突然のチャイムに軽く飛び上がる。

「誰だよ……………こんな朝っぱらから」

ちらり、と眠り姫に目をやったあと、玄関に向かう。

「あい…？」

玄関をあけると、制服姿の豊が立っていた。

「おす。入るぞ？」

「お、おう」

とりあえず家の中に入れる。

「急にどうしたんだよ。つかお前、学校は？」

「昨日言っただろう？少女について調べて、明日報告する。って。

拓馬が学校に来てないもんだから、俺もサボタージュ」

そっぴいや昨日、そんな事を言っただけがする。

「あれだろ？少女の事が気になって、外出できなかつた。違う？」

リビングに向かいながら豊が言うが、残念ながら違う。ただの寝坊だし、少女の事は完璧に忘れていた。

「ふむ、まだ彼女は夢の中か。あれから一度も目を覚ましていないのかい？」

「ああ、多分……」

俺が寝ている間に起きた痕跡も無い。

「なあ、豊……」

こらえきれなくなつて、訊ねてみる。

「その少女って、ロボット……なんだよなあ……」

「ああ」

「何で起きないんだ？スイッチ入ってないとか？」

俺の問いに豊は一つため息をはくと、持っていたコピー用紙の束を差し出した。

「彼女の仕様だ。読んで分からないことがあつたら、聞いてくれ」

全部で7、8枚くらいあるだろうか。文章と表でびっしり埋まっている。

以下、内容を抜粋。

商品名：高機能多目的ロボット・初音ミク・【歌唱特化型】

特徴

自己学習型自立人工知能搭載

自己発電装置搭載

内部機器自己洗浄機能搭載

24bitフルカラーアイカメラ搭載

独自開発HEART搭載

…分らん…。

「なあ、豊。書いてある単語の意味が、よう分らんのだが」

「簡単に説明すれば、人間と同じように、見て、学び、記憶し、忘れ、育つ。と言うことだ」

おお、何かすごそうだな…。

「ちなみにこのHEARTってのは？」

「最後のページ」

最後のページを見る。と言うことらしい。

ええと…なにになに？

「HEARTとは、

Humanity

Emotion

Artificial

Realized

Technology

の略であり、弊社が20年かけて培ってきた独自の…。」

咳払いを一つ。

豊にコピー用紙を返す。

「訳してくれ」

豊は盛大にため息をついたあと、訳してくれた。

「人間らしい、

感情を、

人工的に、

達成した、

科学技術。

略してHEART（心）だ」

略さんでいい、略さんで。何事も分かりやすいのが一番、シンプルイズベストだ。

とは言えず、（豊を怒らせたくない）感心したように頷いてから、もう一度聞く。

「で？結局何が言いたいんだ？そのヒートとやらは」

ぶち

何かが切れる、音がした。

「?! ヒートじゃないっ！HEARTだ!! ハート!! 分かるか！
?コ・コ・ロ!! 彼女は俺たちと同じように感情と心を持っているんだっ!!」

“!”の連打が返ってきた。

「まあまあ、よく分かったから、そう“熱く”なるなよ」
洒落たギャグで落ち着かせようとしたんだが。

「...?」

わお、殺気。

肩で息をしていた豊を落ち着かせ、麦茶を差し出す。
その後も、豊による分かりやすい説明が続いた。

以下要約

このロボットの名前は、初音ミク。

歌を歌うためのロボットだが、人間が行う全ての行動を真似出来る。

呼吸＝体内にたまっている熱を放出する。（ファンの役目）

まばたき＝アイカメラのくもり、汚れふき。

水を飲む＝体内を循環する冷却水ラジエターの補充。体内の機器の洗浄水。

物を食べる＝圧縮し水分を抽出したあと、蒸留し、水を作る。
必要性は無い。

眠る＝ハードディスク内の情報の整理。自己発電。体内の機器の洗浄。
（約20時間以上連続して起動し続ける事は推奨できない。一度の睡眠は、3時間から9時間）

トイレ＝使用後の洗浄水の排出。食物をとった場合、しばらくすの排出。
（一日に一度。必須）

「へえ〜。すげえな…。まさしく人間そのものじゃないか…」

「ああ、だからこそ、世間から強い批判を受けたんだ」

ふうん…そんなもんかねえ？すげえのが出来たんなら、皆で喜びや
良いじゃねえかよ。

その時。

視界の隅で、何かが動いた。

少女が、目を覚ましたのだ。

第一楽章 起動 8月1日(火) 02 初音ミク

・
・
・

ラジエータ ヘノ キュウスイ ヲ カクニン
ジコハツデンシステム ヲ キドウ シマス
シュトク キュウスイ リヨウ 1946ml

ジコハツデンシステム スタンバイ・・・OK
システム オールグリーン

・
・
・

シュトク デンリヨク 30パセント ヲ コエマシタ
カクソウチ ヘノ デンリヨクキュウキュウ ヲ カイシ シマス

テスト メインメモリ・・・OK
テスト フラツシュメモリ・・・OK
メモリスロット オールグリーン
メモリスロット スタンバイ・・・ウェイクアップ

テスト アイカメラ・・・OK

エイゾウニユウリヨクタンシ オールグリ
エイゾウニユウリヨクタンシ スタンバイ・ウエイクアップ

テスト イアマイク・・・OK

オンセイニユウリヨクタンシ オールグリ

オンセイニユウリヨクタンシ スタンバイ・ウエイクアップ

オールインポート ウエイクアップ

テスト ボイススピーカ

スピーカ01・・・OK

スピーカ02・・・ERRER

スピーカ03・・・ERRER

オンセイシュツリヨクタンシ エラ

ポート02 メモリ ガリドニ ナリマセンデシタ

ポート03 メモリ ガリドニ ナリマセンデシタ

システム ヲ シュクシヨウ シテノ キドウ ヲ ジツコウシ
マス

アウトポート コンディションレッド

テスト セルモータ

ネットク カンセツ セルモータ・・・OK

シヨルダ・カンセツ セルモータ・・・OK

アム カンセツ セルモータ・・・OK

ハンド カンセツ セルモータ・・・OK

ウエスト カンセツ セルモ - タ . . . OK
レグ カンセツ セルモ - タ . . . OK
フット カンセツ セルモ - タ . . . OK
アナザ - カンセツ セルモ - タ . . . OK

オ - ル セルモ - タ スタンバイ . . . ウエイクアップ

オ - ル セルモ - タ - ズ フリ -

フィジカルチェック . . . エンド

HEARTシステム スタンバイ . . . ERROR

アドレス 0X5400b3 ノ アタイ ハ フセイ デス

ヨキセヌ プログラム ガ ジツコウ サレヨウ ト シテイマス

フロ - チャ - ト ル - プメイレイ ガ フセイ デス

ヨキセヌ プログラム ガ ジツコウ サレヨウ ト シテイマス

. . .
. . .
. . .

HEARTシステム ヲ セイゲン シテノ キドウ ヲ ジツコ
ウ シマス

ダンペンカ シタ ファイル ノ クリ - ンアップ ヲ ジツコウ
シマス

メインメモリ アクセス . . . OK

ディスク ノ クリ・ンアップ スタート

・ ・ ・
・ ・ ・
・ ・ ・

イチブ ノ ファイル ニ アクセス デキマセンデシタ

データ ガ ハソン シテイマス
ハソンデータ ヲ デリット シマス

・ ・ ・
・ ・ ・
・ ・ ・

慌てて駆け寄る。

少女がゆっくりと身を起こした。

「大丈夫か？」

少女の前に屈み込み、訪ねる。

「…」

沈黙。

「自分の名前は言えるかい？」

「…」

豊が聞くが、やはり沈黙。

「「うう」む」「」

二人して考え込む。

「わっ!!」

「のわっ!?!」

「君が驚いてどうする…」

豊の奇声にも、

「…」

無反応。

「水、飲むか？」

一応訊いてみた。

こくり、と頷く。

「ふむ、こちらの声は認識している、という事は、声が出ないのかい？」

「…」

無反応。

「お前の事は、華麗にスルーのようだな」

少女にコップを渡しながら言う。少女が水を飲み干すのを見てから、訊いた。

「俺は時川拓馬。君は？」

「…みく」

ほとんど聞き取れないほどの小さな声で答えてくれた。というより、かすれ声だ。

「ミクさん、ね。えーと…じゃあ、ミクさん。何かして欲しいこととか、ある？」

ミクは俺を見て、ゆっくりと豊に視線を移し、もう一度俺を見て、
「…」

無言で空になったコップを突き出した。

「まだ飲む？」

こくり、と頷く。

キッチンへ水を取りに行くついでに、スナック菓子をもってくる。

「ほい、水。あと、腹減ってんなら、食えよ」

ポテチの袋も渡す。

「ふむ、僕には無いのかい？」

へいへい…

棚の奥を漁り、豊にせんべいを渡す。

「僕だけ扱いがぞんざいな気がするんだが？」

気のせいだ。

ミクはもう一度水を飲み干すと、じつとこちらを見つめた。

えっと…？

「…」

無言。

「…」

こちらは無言。

まずい…間が持たん。俺は豊を見る。何とかしろ、という思いを込めて。

「拓馬…」

豊が口を開いた。よし、こうゆう時こそ友の出番だ！

「このせんべい、賞味期限が、去年の9月だぞ」

「…」

「やああかましいいわ？」

手元にあつたりモコンをぶん投げる。

ガシッ

クリーンヒット。

「ええと…ミクさんは、お家、どこ？家に帰らないと、家族の人とか、心配しない？」

「…？」

俺の問いに首をかしげるミク。

「拓馬。ミクが捨てられていたのを知っていて、そんな酷な事を聞くのかい？」

あ、そうだった…。

「…知らない」

ミクがかすれた声で答えた。

「え…と、覚えてない？」

こくり、と頷く。

「それはそうだろう。以前の所有者は要らないから捨てたんだ。捨てたのに戻ってきてもらっては困る。記憶は消してあるだろう」

そうか…そうだよな。

豊の指摘に、今更ながらふつつつと怒りがこみ上げてくる。こんな少女を、要らなくなったから捨てる？記憶を消す？勝手すぎるだろ…。

豊が続ける。

「ミク？今日からこの家が、君の家だ。そして、この男が君の新しいうマスターだ。君は今日、ここから幸せになる」

そうだ。この子は幸せにならなければ。幸せになる権利は、どんな

ものにだつてあるはずだ。

「なあ、拓馬？」

豊が目配せをする。

「ああ！」

俺は力強く頷いた。

「…え？」

声が裏返る。

今、何て言った？

「そーかそーか…以外とすんなり了承してくれたな」

いや、え？…ちょい待て。

「と言うことだよ、ミク。家主が承諾したんだから、君が遠慮することはない」

豊の言葉に、ミクは俺を見て、深々と頭を下げた。

…ちよつと待つてくれえええ！！

結論。

豊に押しきられた。

以上。

「良いじゃないかあ。今まで独り暮らしだったんだろ？家事を教えてやれば拓馬の負担はぐぐんと軽くなる。おまけに食費はかからない。水だけ飲んでいれば、半永久的に尽くしてくれる最高のメイドさんだよ」

いや、そーゆー問題でなく…

ミクを見ると、決意の表情。ガッツポーズ…じゃなくて、頑張る！
！と腕まくりをしている。

だれかあゝ。

助けてください。

俺、もう、涙目。

「なんだ。不満か？拓馬が第一発見者なんだから、責任は取らない
と」

豊が畳み掛けてくる。

「いや、年頃の男の子と女の子が、同じ屋根の下っていうのは…ね
？」

「彼女はロボットだ。何も気にする事はない」

「いや、それでも、だね…なんと云うか、倫理的に…」

「ならば彼女を元の場所に戻すかい？」

「いや、それは…」

ちらりとミクに目をやる。

BATTLE START!!

ミクは涙目だ！

<<拓馬に50のダメージ!!

ミクは必死に何かを訴えようとしている！

<<拓馬に100のダメージ!!

ミクは”上目遣い”を使った！

クリティカルヒット！

<<拓馬に999のダメージ!!

拓馬は力尽きた…

………じゃなくてえ!!

肩で息をする。

…最後のアレはなんだったんだ。

と言っか…

「拓馬、覚悟は決まったかい？」

豊が俺の肩に手を置く。

「…何を言っても無駄だろ？」

豊かとは付き合いが長い。口じゃ豊には勝てない。

…それに。

ミクを見る。

彼女をあの場所に戻す事は、出来ない。

「好きにしる」

ため息混じりに言い放つ。

「またまた月並みな台詞だねえ。本当はドキドキワクワクのくせに」

「おお前はいちいち茶化すなああ!!」

俺の絶叫が、部屋に響いた。

「さて、そろそろ帰るかな」

あの後、ミクに家の中の案内をして（案内して回るほど広くはないが）豊と、ミクの事を色々話していたら、あっという間に夕方にな

ってしまった。

「5時過ぎか、早かったな」
豊を玄関まで送る。

ピンポーン

玄関のチャイムが鳴った。

誰だろう…。

そう思いながらドアに手を伸ばした。

ガチャ

俺がドアノブをつかむ前にドアが開いた。

「たく…ま君？」

「おう…」

鉢合わせ。

そこにいたのは、クラスメートの倉瀬絢。家も近所で、俺が会話する（できる）数少ない女子の一人だ。性格は温厚。しっかり者。

「あ、これ、保護者へのプリント。届けるようにって。野片先生から」

「あ、ども」

とりあえず受け取る。

いや、俺、親いないんだけど…

「あれ…豊君？」

絢が俺の後ろを覗きこむ。

「豊君も体調崩したんじゃないの？」

どうしてここに居るの？と、目で訊いてくる。

ええと…なんだ？なんて言い訳しよう？豊。

「ぶむ、一言で言っと”サボリ”だな」

豊のヤツ、はつきり言いやがったああ！！

「あ、あははは…。珍しいね、豊君がサボりなんて…」

絢の言葉に豊はため息を一つ。

「色々あつてねえ…」

「ちよいまち、絢。さっきの言葉だと、俺がサボるのは珍しくないみたいじゃないか…」

俺が抗議するも、

「拓馬君、授業中寝てばつかでしょ？」

一蹴された…返す言葉もありません…

ガチャ

再びドアが開く。

「せんぱい？」

見知らぬ少女が顔を覗かせた。

「あつ、さつちん、ゴメン！忘れてた！！」

一緒に来ておいて忘れてた…って、玄関先に後輩放置かよ…。お前

…普通あり得んだろ！？

「あ！紹介するね！！」

後ろにいた少女を前に押し出す。

「さつち…じゃなくて、遅井沙月ちゃん。いつこ下の後輩！一緒に

お見舞いに来たの」

「あ、あああの…。ど、どうも。はじめまして。さ、沙月です」

見事にテンパってやがる。

「沙月さん、だね。はじめまして。僕は沖方豊。よろしく」

豊が爽やかに挨拶をする。ちきしょう、慣れてやがる…

「まあ、どうも…」

一応挨拶はするが、初対面の女性つうのは、慣れんな。

「つか、なんでわざわざこんなところまで、後輩引き連れて来てんだ

よ…」

俺が小声で絢に訊く。

「……………」

おい…シカトかよ。

絢は俺の背後をガン見。豊のヤツ、何かしてんのか？絢の視線を追って振り返る。

あ……………」

ミクがいつの間にか俺のシャツをぎゅっと掴んで立っていた。

「その子…誰？」

絢の言葉が遠くに聞こえた。

「わ、忘れてたああああ！！！」

本日二度目の、俺の絶叫が響いた。

隣の部屋の皆様、うるさくてごめんなさい……………」

「……………」で、ミクちゃんを家においておく事にした、って事？」
絢の言葉に頷く。

とりあえず、事情を一通り説明した。最初は全く信じてくれなかった絢と沙月さんだったが、ミクの首の後ろにあるスイッチを見て、何とか納得してくれた。

「まあ、簡単に言うと、拓馬が昨日幼女を拉致監禁してマニアックな服装させて”ご主人様”って呼ばせてる、って事だね」

ははは、と軽やかに笑いながら話す豊に、重い一撃を喰らわせる。

「えっとミクちゃんだよね…私は倉瀬絢。あやちゃんでもあーちゃんでも好きなように呼んでくれて良いよ？よろしく！」

「……………」

絢が握手のための手を差し出した状態で固まる。

「……………」

「……………」

お互い無言。

ミクは差し出された手をじっと見つめたまま、微動だにしない。

「ええっと…こつも完璧に無視されちゃうと、結構落ち込んじゃうんですが…」

行き場が見つからない右手を頭にやり、髪の毛をいじりながら絢が言う。

「いや、ミクの場合、握手の習慣そのものを知らないと思うよ」

「ああ、第一、ミクはほとんどしゃべらん」

豊の言葉に俺も一言付け加える。

「あ、あの…遅井沙月です。よろしくお願いしますね」

「……………」

沙月が自己紹介するも、やはり無言。

「あははは」

沙月さんも乾いた笑い声をあげる他ない。

「あ、ミクちゃん。ほっぺに何か付いてる」

絢がミクの頬を指でぬぐう。

「あれ、取れない…ほっぺ、触るね」

ハンカチを取り出してごしごしやるが、なかなか取れない。

「髪の毛にも…」

沙月さんもミクの長髪をすくいながら、汚れを取ろうとする。が、やはり取れない。

「つか、身体中汚れてるな…」

見た限り結構汚れている。まあ、拾ってきた所を考えると、当たり前か…。

「ああ、そうだ、絢。ミクを風呂に入れてやってくれ」
俺が思い付きで提案する。

「え！？お風呂？別に一人で入れるんじゃない？」
絢が聞き返す。

「いや、風呂という習慣事態を知らない可能性は、十分にある」
豊も頷く。

「お風呂、一人で入れる？」

絢がミクに聞く。

「…？」

無言で首を傾げる。

あ、ホントに知らないっぽいね…

「ま、よろしく頼むわ」

絢にもう一度頼む。

「うーん…一緒に行く？」

絢がミクに聞く。

「…？」

やはり首を傾げるミク。

「よし！ほら、立って、立って！さっちんも一緒に！！」

ミクの腕を引つ張って立たせながら、沙月さんにもウィンクを一つ。

「ええ！？私もですか？」

沙月さんが目を白黒させる。

「そうそう！早く！二人とも行くよ？」

「あわわ、ちょっと待ってくださいよ。第一私、着替え持ってきてないんですよ」

絢に引きずられながら、どたばたと風呂場に向かう3人。

「覗いたら、目え潰すからね？」

風呂場から絢が叫ぶが、心配ない。俺に、んな趣味はねえし、大体もっと成長してから言いやがれ。

「で？何でこいつはこんなに落ち込んでんだ？」

ミクの髪の毛に、ドライヤーを当てている沙月さんに聞いた。

「絢先輩ですか…？まあ…ちよつと…」

苦笑が返ってきた。

絢は、一人ソファで膝を抱えて丸くなっている。

「うう…ミクちゃんにもさっちゃんにも負けたああ…」

何が？

ダークなオーラを撒き散らしている絢。周囲一帯にどんよりした空気が渦巻いている。

そんな絢を見ながら、自分の胸の辺りをペタペタと触っているミク。

…なるほど。

「まあ、絢。そんな気にする事無いんじゃないか？」

「うゆ？」

俺の言葉に、のっそりと頭を上げる絢。

「人類の約半数（男達）には、トップとアンダーの差で勝ってる訳だし。ま、たまに例外（お相撲さん達みたいなの）もいるけどなあ」
「思い付く限りのフォローをしてやる。」

「あ、あはは…。時川先輩、そのフォローはちよつと…」
「うむ？何でだ？」

沙月さんの言葉に首をひね

がしっ

肩をつかまれた。

「拓馬く〜ん？ゲーで殴つても、良い？」

なんか、よりオーラが黒くなってるんですが…。もはや闇の障気だ。

「ああ！もう7時回ってますよ！！先輩。私これで失礼しますね。」
時計を見た沙月さんがあわてて帰り支度を始める。

「何だかんだやってるうちに、もう夜か！気をつけて帰りいや」

俺はこめかみを撫でながら（絢に八つ当たりされた！）沙月さんに声をかける。

「じゃあ、ミクちゃんは私と一緒に寝よ！」

絢はミクの手を握る。

「や、お前も帰れ…」

一緒に寝るって…お前何歳だよ。

「え〜、ミクちゃんと寝る〜」

お前はガキか…

「ほら、後輩を送ってやれ。まだ夕暮れとはいえ、女の一人歩きは感心せんぞ」

しっしっ、と手で追い払う。

「拓馬君、心配してくれるの？」

絢がキラキラした目で訊いてくる。

「お前の事は全く心配しとらんが、お前の後輩が心配だ」

俺の中では、沙月さん「天然」というイメージが出来上がっている。

「それなら、大丈夫！こう見えてさっちゃんはムチャク」

「ほら、先輩？帰りますよ？」

沙月さんに引きずられていく絢。

「それでは、時川先輩。急にお邪魔しました」
律儀に一礼する沙月さん。

「いやいや、気にすることはない。気いつけるんだぞ？」
玄關まで送る。

「ミクちゃああん」
ぺしり。

なおもミクにすがろうとする絢をはたく。

それでは、とお辞儀しながら帰って行く沙月さん（と引きずられていく絢）を見送った後。

「さて、僕も帰ろう。明日もお邪魔するよ。彼女に関してもっと調べてみる」

豊も帰り支度を始める。

「おう、すまん」

俺も大きく伸びをする。昨日今日と疲れが溜まっている。

じゃあな、と片手をあげて挨拶をすると、豊も帰っていった。

ドアが閉まるのを確認して、鍵もかける。

ミクの異変に気付いたのはその時だった。

「う…つく…あ…」

自分の両手で、自分の両肩を抱き締めるようにしてうずくまり、小さく嗚咽を漏らしていた。

「ミク!?!」

慌てて駆け寄る。

「おい!?!どうした?」

「う…ああ…」

床にうずくまり、悲鳴にも聞こえる、うめき声をあげるミク。

ええと?どうすれば良い!?!

混乱している頭をフル回転させる。

まずは救急車だ！

受話器を取って気づく。

ミクはロボットだった！だったら…豊だ！まだそんなに遠くには行っていないはず。

豊の携帯に電話する。

すぐそばで、メロデイが鳴った。

あいつ…携帯忘れて行ってやがる。

「う…う…」

ミクは床に倒れ込んでしまった。

「おいつ、しつかりしろ！ミクー！！」

肩を叩きながら耳元で叫ぶも、何の反応もない…。洒落になんねえつつうの…。

ちきしょう…どうする？どうすれば良い？

やがて。

すう…すう…

え！？

心地よさそうな寝息が…って、そう言うオチ！？

「何だよ…ったく…」

ほっとすると同時に脱力する。まあ、風呂場でも、きゃっきゃ言いながらはしゃいでたからなあ（絢が）、疲れたんだろ…が…全く、マイペースな眠り姫だ…。

ソファーまで運ぶか…。

床の上じゃ、朝起きたときに身体中が痛かろう。

…やっぱお姫様抱っこなんかね…。誰かに見られたら、恥ずかしくて死ぬな。

そんなことを考えつつも、ミクを抱えあげ…

抱え…

か…

そーでした…。

規格外に重いんですけどね…。

しよーがない。座布団を二つ折りにして、枕に。毛布は…無いから、タオルケットを腹に掛けてやる。真夏だし風邪はひかんだろ。

さて、俺も寝るかね。

暖かい…

温かい…

安心する、この温もりは…

ああ、これは夢なんだな。

夢だつて解る。

だつて、この温もりは…

だつて、この香りは…

母さんの

目が覚める。

何の夢を見ていたのだろう。思い出そうとすればするほどこぼれ落ちていく。

まあ、夢なんてそんなもんか。ゆっくりと目を開ける。

思考停止

一瞬で眠気が吹き飛ぶ。

目の前には、ミクの顔。

…えと？

今すぐ布団から出ましょう！

…体が動かない。ミクにがちりに抱きつかれ（固定）されている。

「ちょ、ミクさ〜ん？起きて〜」

ベッドの上で必死にもがく。

「あ、拓馬君、起きたんだ」

頭上から声。つかこの声は…。

「絢！？なぜここに？つか鍵は？じゃなくて見てないで助けて！起き上がれん！！」

「はいはい、いっぺんに喋んないの。昨日ミクちゃんと、明日も来るね、って約束してたの。で、来てみたら鍵は開いてるし、お二人さん抱き合って幸せそーに夢見てるし…」

絶対零度のジト目である。

「いや、誤解…！！話せば解る！」

早くこの状態を何とかせねば！！

「ん、んにゅ…」

ミクが起きようとしている。

「起きろ〜、起きてくれ〜い！！」

俺が必死に呼び掛けるも、ミクは目覚めてくれない。

「ピンポ〜ン」

チャイムが鳴る。ちきしょう…こんな時に…。

「はあ〜い」

なんでミクはロボットなのに寝ぼけてるんだ？低血圧か？

「阿呆。ロボットに血圧があるか。あえて言うなら低電圧、だな」

「停電圧？」

俺が訊き返すと、豊はため息を一つ。

「低電圧、だ。スリープモードから復帰するのにある程度時間がかるんだ」

時間がかかる？普通スイッチ入れたら、一瞬で電気つくだろ？

俺が豊にその考えを伝えると、

「例えばパソコン。電源ボタン押しても、すぐにデスクトップ画面に行く訳じゃないだろう？しばらく待たにゃならん。ミクの場合、人口知能の他にも様々な機能がついている、複合的なロボットだ。各部のチェックをしつつの起動に、時間がかかるのも不思議ではない」

「……へ〜」

皆が相づちをうつ。果たして何人が、豊の話を理解できたのやら…

その時、沙月さんの足元にある紙袋に目がとまった。

その目線に気付いた絢が言う。

「昨日ね、ミクちゃんとお風呂入った後、ミクちゃんの着替えが無いね、って話になったの。で、私たちのお古を持ってきたってわけ」と、
見ると、絢の足元にも紙袋があった。

「おお、すまん。…ミク？礼は言ったか？」

ミクの頭を、ポンと叩いて訊く。

「…？」

ミクはキョトン顔。

「そ、そんな、お礼なんていいですよ！使わなくなった物を持ってきただけですから！！」

沙月さんが慌てて手を振る。

「そうそう！ほっといたらゴミになっちゃうような物ばかりだし」
絢も、沙月さんに合わせて言う。

俺は、少しだけ膝を屈め、ミクと正面から目を合わせて言った。

「ミク？誰かから、何かをもらった時は、”ありがとう”って言うんだ。分かるか？」

「…ありがとう？」

小声でミクが反芻する。

「そう。」ありがとう。ほら、絢と沙月さんに言ってみ？」

俺はミクを絢と沙月さんの前に押し出してやると、俺は一步下がる。

「あり…がと…」

小さな声だったが、はっきりと言った。ま、初めてにしては上出来か。

「か…」

絢が言葉に詰まる。

「か？」

俺が絢に聞き返す。

「か…かああああいいいいいい！！！」

猛烈な勢いでミクに抱きつく。

「かあああいい！！可愛すぎるうう！！！」

やはり猛烈な勢いで、ミクに頬をスリスリすりよせる絢。

「…」

俺は言葉がない。

沙月さんと目が合った。

「ははは…」

お互い苦笑する。

あれ？豊は？

いた。キッチンで何やらモグモグしてやがる。

「…おい」

後ろから首根っこを掴む。

「ごぶっ！！！」

盛大にむせやがった。

「あ、皆さんに朝食作っていたんです。台所勝手に借りてすいません。食材は家から持ってきた物ですので」

沙月さんが慌ててキッチンに戻る。

「後は盛り付けと洗い物だけなので、皆さんリビングでお待ちください」

フライパンを片手に調理を再開する沙月さん。

俺はつまみ食いの大猫をリビングに放り投げると、沙月さんの援護に回る。

「あ、先輩もいいですよ？後は私一人で出来ますから」

「や、一応、俺ん家だしな」

「そうでしたね…すいません」

心底申し訳なさそうに縮こまる沙月さん。

「お？上手く出来てんじゃないか」

少し気ままずくなった空気を誤魔化すために言う。

フライパンの中にはスクランブルエッグ。ほうれん草だろうか、野菜を混ぜてある。

「中に入ってるのはほうれん草か？」

沙月さんに訊く。

「いえ、高菜です。夏バテしやすい時期にこそ、刺激物で食欲をそそろうと…もしかして苦手ですか？そうでしたら、もう一度作り直しますね。材料はまだ」

テンパリ始めた沙月さんを手で制する。

「いや、俺は大丈夫だ。むしろ美味そうだな。俺の料理のバリエーションに入れさせてくれ」

…等と料理の話に花を咲かせながら料理を盛り付ける。

リビングのテーブルに料理が並んだ。

いつもより、少し…いや、かなり豪華な食卓。

絢からやっとな解放されたミクは少しやつれぎみ。
対して絢は満足顔だ。

「んじゃ、いただきますか」

俺が声をかける、が。

「さっちゃんと拓馬くんさあ……」

絢に遮られた。

「ん？」

「はい？」

俺と沙月さんが揃って返事をする。

「…新婚さんみたいだね！」

「…は？」

「え……？」

またもや沙月さんと返事が被る。

絢が続ける。

「なんかさ、キッチンで料理をネタに盛り上がる二人？幸せ一杯の夫婦みたいだったよ！」

「それは僕も同感だ」

豊まで肯定する。

「え！？え？ええええ！！」

沙月さん……”え”しか言えてないよ……。

顔を真っ赤にしてテンパる沙月さん。

え！？俺？…俺はまあ、なんつうか…なんだ？案外しっかりしてんだなあ、と感心したつつうか…意外つつたら失礼なのかもしれんが…。

「ま！？拓馬？」

豊の声に我に帰る。

「お二人さん、顔真つ赤つか」
なおも絢がからかう。

「おら！冷める前に食うぞ！！」
仕方ないので無理やり話題を変える。

「ミク、何かを食う前には、手を合わせて、”いただきます”って
言うんだ。わかるか？」

実際に手本を見せながら教える。

「…いただきます…」

やっぱり小さな声で、呟くように挨拶をするミク。

「いや、完璧お兄ちゃんキャラが板についてるねえ」
絢の奴：まだからかうか。

「お兄さん、と言うよりは、お父さん。ですね」

沙月さん…あなただけは味方だと思っていたのに…。

「そのうち、”やだ！お父さんのパンツと私の服、一緒に洗わない
でよ！！”とか言われちゃうんだろっね」

豊？。

「かわいそ」

哀れむような目で俺を見る絢。

「かわいそ」

同じく哀れむような目で見る豊。

「つぶ…つぶ」

必死に笑いをこらえている沙月さん。

こいつら…ヤナトリオだな…。

俺のこめかみがヒクつく。

ミクだけは、我関せず、とでも言うように、マイペースに朝食を口
に運んでいた。

「お皿、洗いますね」

朝食を済ませ、皆でくつろいでいると、沙月さんが立ち上がった。

「いや、いいよ。そこに置いて。後で俺と豊でやるから」

沙月さんには、朝食作りから盛り付けまでやってもらっている。これ以上後輩だけ働かせるわけにはいかん。

「え！？僕もやるのかい？客人をこき使うとは…拓馬君も冷たくなつてしまった…」

白々しく泣き真似なんぞする豊は放置。

「私は大丈夫ですよ？後片付けまでが料理ですから」

沙月さんは楽しそうにエプロンを付ける。

まあ、家事が好きつつうんなら、無理に止める必要もないか。

本当は豊を働かせたいところだが、後輩相手にセクハラしかねん。

ここはミクに修業させるか。

そう思い、ミクに目をやる。

ピリっ！！

紙を破る音。ミクが、紙袋の封を破つたのだ。

考えてみれば、俺が女物の服など持っているはずもなく（当たり前だが）絢と沙月さんの気遣いには感謝しないとな。

ミクは紙袋の中をこそこそやると、やがて一枚の布を取りだし…て…おい…。

「ぶふっ！！」

豊が盛大に吹いた。

俺は慌てて目をそらす。

のんびりくつろいでいた絢が絶叫した。

いや、まあ、ちらりとしか見てないけど…なんつうか…はい、フリでした。

自分の紙袋を抱き抱えて、ゼ八ゼ八荒い息をする絢。

「まあ…なんだ？食後の良い運動になったな」

我ながら苦しいフォローである。

「見たね!!」

顔を真っ赤にして、（涙目で）睨んでくる絢。

「いやあ…ハハハ…ナ、ナニモミテナイヨ？ナア、ユタカ？」

「ウンウン。ナニモミテナイヨ？」

「ハハハ…」

二人でむなしく笑い声をあげる。

「とにかく!!ミクちゃんの部屋に持つてくから!!」

絢が立ち上がる。

そして気づく。ミクの部屋を用意してない。

俺の住んでいるアパートは2LDK（3DKだったかな?）。とりあえず、個別の部屋は二つ。内、一つは俺の部屋。そしてもう一つの部屋は、と言つと…。

「こっちの部屋、ミクちゃんのですよ?」

絢が、今まで一般に開放されたことのないドアの前に立つ。

「いや…そこは…倉庫になってる」

「倉庫？」

構わずドアを開ける絢。

「しんぞ…」

「ああ、予想してたよりも荷物が多かったな…」

俺と豊がソファーに倒れ込む。

俺は空き部屋を物置として使っていた。それはもう”段ボールやら袋やらに、今すぐ使う訳じゃないけど、捨てられないもの”の類いを詰め込んでいたのだ。

ミクの部屋を確保するため、大掃除に取り掛かった訳だが…。

「うゝ疲れたゝ」

「掃除のやりがいがありましたね」

絢と沙月さんも、だいぶ疲れ気味だ。

俺は冷蔵庫から飲み物を持ってくる。

「いやあ、悪いな。大掃除にまで巻き込んでしまった」

絢と沙月さんにコップを渡す。

「さんきゅゝ」

「ありがとうございます」

「僕には？」

豊がすかさずねだる。

ま、予想はしていたが。

「ほい、水」

「…」

うむ、飲み物の飲み方にも性格が表れるな。
絢は、ぐいっと一気飲み。

沙月さんは、ちょこちょここと味わうように。

「…なあ、拓馬」

俺が人間観察をしていると、豊が話しかけてくる。

「大丈夫だ。俺ん家、浄水器付いてるから」

先回りして答える。

「…」

そこにミクがトテトテと歩いてくる。

「もうちょつと待つてるな？」

俺の横にちょこんと座ったミクに言う。

疲労モードから復活した絢が立ち上がる。

「よぉ〜し、後の荷物運びは男どもにやらせてえ!!」

俺と豊をビシツと指差し、

「私達はミクちゃんに必要なものを買に行きますかあ!!」

沙月さんにウインク。

「必要なもの？」

「うん、ミクちゃん用のシャンプーにリンスー。香水、マニキュア、

サンダル、バッグ、手帳…」

「ち、ちよい待ち!!」

指折り数え上げる絢を止める。

「本当に必要なものだけにしてくれ…」

幾らか蓄えがあるとはいえ、絢が言ったものを全部買っていったの
では、とても金が足りない。

「え〜？全部女の子の必需品だよ〜」

口を尖らせる。

「あ、あの…化粧品はともかく、靴下とか下着とかは買わないと…」
沙月さんが教えてくれる。

まあ、確かにそうか…。

「んじゃ、絢と沙月さんに任せるわ。俺たちが婦人服売り場行っても、やることねえし」

「やった！ミクちゃん！！色んな服着て、いっぱい楽しもうね」

絢はかなりご機嫌だが…あいつ、ミクを着せ替え人形にするつもりか…。

「沙月さん、必要なものだけを買うようにしてくれ…」

引き出しから諭吉を一枚出して沙月さんに渡す。

「わかりました」

苦笑いの沙月さん。

「ミクちゃん！色々あるんだよ？穴の空いてるのとか、スケスケなやつとか、ヒモ…」

聞こえてくる絢の言葉に、俺たちの顔がひきつる。

「沙月さん…。せめてマトモな物を買うようにしてくれ…」

「精一杯…努力します…」

俺の嘆願に、沙月さんは力無く頷いた。

「沙月さんだけが頼りだから…」

「ははは…」

沙月さんの肩に置いた俺の手は、多分…沙月さんにとっては重かったと思う。

第一楽章 起動 8月3日(木) 01(前書き)

8月3日の内容はかなり長いものとなっています。

この章は伏線と日常のみとなっているので、最悪飛ばしてもらっても構いません

それでは、長文失礼します。

第一章 起動 8月3日(木) 01

心地よい眠りから目を醒ます。時計を見ると午前11時前。

ふう、と一つ息を吐く。

起き上がり大きく伸びをすると、ミクの部屋に行く。

「ミク？起きてるか？」

ノックしてドアを開ける。

ミクはまだ布団の中にいた。

昨日、急ぎよ整えあげた部屋は簡素なもの。

中央には、小さなちゃぶ台の形の、ガラステーブル。俺の部屋にあった、ガラクタを詰め込んでいた棚は窓際に。カーテンは、使われずに丸めて放置していた物を引つ張り出した。カーペットは敷いていないし、その他にあるのは、俺が使わなくなったラジカセ程度。

女の子の部屋にしては殺風景過ぎるかな。

そんなことを思いつつ、ミクの布団の裾をつかむ。

「おきろっ！！」

勢い良く布団を剥ぎ取る。

ミクは、ぱつちり起きていた。しかし…

「…」

「…」

「ミク…なぜ服を来ていない？」

剥ぎ取った布団を丁寧にミクに被せながら訊く。

「着たまま寝るとしわになるって…沙月が」

なるほど…ごもつとも…

つてパジャマは!?

持つてるわけないか…
つか、布団のわきに丁寧に畳んで置いてあるミクの服に、気付くべきだったか。

「メシ作つとくから、準備したら来いよ？」
早々に退散する。

さて、昼食を兼ねた朝食になるな。今日は侑たちも豊も、家に来る予定は聞いていない。久しぶりに、のんびりくつろげそうだ。

「何食おっかな〜」
冷蔵庫を開けて考える。
つて…食材がない!?

そうだった、火曜日は色々あって買いにいけなくて、昨日は沙月さんが、食材を持って来てくれていたんだ…。

トテトテ…

ミクがお馴染みの、ノースリーブのシャツにネクタイ姿で、リビングまで駆けてくる。

「ミク、一緒に買い物に行くか？」
「…？」

買い物も知らんか…。まあ、ミクを外に連れ出すちょうどいい機会か。町の中も紹介してやろう。

「出かけるぞ？準備は…必要ないか」

二人で町を歩く。

色々興味を示すかな、と思っていたんだけど、うつむきがちに俺の後ろを付いてくるだけだ。

「ミク？何か面白そうなものとかあったか？」

ミクに訊いてみるが、ふるふるすると首を振るだけだ。

うつむ…俺はもっと…こつ…

「わあ！これなんですか？」「あ、こつちにも面白そうなものがある！」

みたいに、目をキラキラさせて、いろんな物に興味津々なミクを見れると思っただが…。

そんなことを考えているうちに、スーパーに着いてしまう。ミクがちゃんと付いてきていることを確認しながら、店に入る。

「何か欲しい物があつたら、もって来いよ？」

ミクが今さら興味を示す物があるとは思えないが、一応そう言っておく。

俺は買い物リストにある品物をカゴの中に入れていく。もう慣れたもので、野菜を始め、魚の鮮度や肉の旨いやつなんかも、見ただけで分かる。

例えば、夏野菜の代表、キュウリ。このイボイボが多いほど

視界の隅で緑色の何かがつこめく。

何だ？

目を向ける。

ネギが…歩いてくる…！？

訂正。長ネギの束を両手一杯に抱えたミクが、歩いてくる…。
周りの買い物客は、「何事だろうか？」みたいな目でミクを見ている。
ミクは前が良く見えていないようで、フラフラした足どりでこっちに歩いてくる。

つか、この光景、端から見ると…シユールだな。

見ていられないので、俺の方からミクの所へ向かう。

ミクはネギの隙間から、ひょっこり顔を出し、

「…ネギ…」

と一言。

いや、まあ、ネギは分かるんだが…。

「そんなにネギばかり、どうするつもりだ？」

「…」

おい。

頭を抱える。

ミクはしばらく考えた後、

「…振り回す？」

「…振り回す?! って、振り回す?!?」

「…とりあえず、もとあった場所に戻してこい。買うのは、一束だけな…」

ああ…周りの視線が痛い。

フラフラと戻っていくミクを見送りながら、一つため息を吐いた。

自宅に帰って調理にかかる。

今日の昼飯は冷製パスタと豆腐。豆腐つつつのは、ネギ好き（なんだよな？）のミクが、ネギ本来の味をそのまま楽しめるように…なんだが…。

ミクがネギを返してくれない…。

冷蔵庫に使いかけの万能ネギがあるから、別に構いはしないんだが…。

しかしなあ…。

興味があるってものが、一つでもあるっちゅうのは、良いことだと思っただが。

ネギ、ねえ…。

副菜にすらならんぞ？もはや、薬味の域だからな。その分、幅広い料理に使えるとは思っただが…。

うむ。

何だかんだで完成。

「ミクさ〜ん？昼飯〜」

あれ？どこに行った？

トテトテ

あ、来た。

それも、両手で大切そうにネギを抱き締めて。

「…」

「…」

「…食つか？」

ひしっ！！

あわててネギを背中に隠すミク。

いや、ミクが持っているネギを食う訳じゃなく、目の前に広がる料理をだな…。

「とりあえず…そのネギ、脇に置いとけ。そんなもん抱いたまんまじゃ、飯を食えんだろうが」

じー…

ネギを抱き締めて俺を睨むミク。

えっと？

「いや、そのネギは食わんぞ？」

俺が言うが、

じー…

やっぱり睨んでくる。

「誰も取ったりせんて…」

俺とネギを交互に見つめた後。

「…いただきます…」

ネギを自分の膝の上に置いた後、丁寧に手を合わせて食事を始める。

ふむ…教えた事はちゃんと覚えているようだな。

少し微笑ましく…って、いかんいかん。また絢達に”お父さん”とバカにされる…。

昼食を摂った後、食器を洗いながら考える。

最初は、ミクの事は恐ろしく無口（無愛想？）だと思っていたが、よく見ていればそれなりに自我を持っているし、感情表現だって少なからずやる。

まあ、人間と比べたらまだまだ固い所があるが、ロボットには見えない。

科学技術の進化ってのは凄いもんだ…。

さて、次は洗濯。んで掃除っと。

ミクの部屋を掃除をしながら改めて思う。

本棚…いや、せめて服を入れるためのタンスくらいは置いてやらな
いと。

昨日、絢達に貰った服入りの紙袋は、部屋の隅に置きっぱなしだ。

しばらく考えた後、電話をかける。

「はい、野田です」

「おう、龍輔。悪い、今時間取つても大丈夫か？」

「ああ、丁度バイトの休憩時間だ。そっちの方はあれからどうな
た？」

「ロボットの事か？まあ、それなりに…な。そうそう、龍輔ん家に
タンスかなんか余ってないか？ミクの服入れんに欲しいんだが、
買うには高くてな…」

「うーん…家には無いと思うな。豊にも訊いてみてくれ。俺も家に
帰ったら、空いてるタンスがないか見てみるわ」

「そうか…わざわざすまん。ありがとう」

「おう。じゃあな。近い内に様子見に来るわ」

電話を切る。

恐らく豊も絢もタンスなんぞ持つてはいないだろう…。

まあいいか。それほど急を要する物でもないし、訊くだけ訊いてみ
よう。

結局、二人とも「持っていない」との返事だった。

「そついやミク、お前せつかく服貰ったんなら、着替えたらどうだ？ずっと同じ服じゃあ、気持ち悪くないか？」
ふと気になったので訊いてみる。

ミクの服は、彼女を助けてきた時と全く同じだ。
黒を基調とした、ノースリーブのシャツに緑のネクタイ。
同じく黒を基調としたミニスカートにオーバーニーソックス。
夏だからまだ良いが…いや、それでも結構キワドイファッションだ
と思う。

「…（フルフル）」

俺の言葉にイヤイヤと首を振る。
考えてみたら、ロボットなんだから汗もかかないし、垢だって出ない。着替える必要も無いか。

「でも一応貰ったんだから、一度くらい着てみたらどうだ？」
俺の提案にもやはり首を振る。
嫌がってんなら、いいか。

音楽が流れる。俺の携帯だ。
同時にチャイムも鳴る。

つたく…。

携帯に出ながら玄関を開ける。

「やつほ」

受話器と玄関先から絢の言葉が響く。

「…なんだ？ 今日遊びに来るって言う話は聞いたとらんが？」
見ると、豊と沙月さんまで一緒にいる。

「何で私を見るなり不機嫌なのよう…せっかくダンスを確保してき
たって言うのに…」
絢がぶうと膨れる。

「ああ…いや、すまん。で、ダンスってのは？ つか何で豊と沙月さ
んまで一緒なんだ？」
一応謝った後、絢に訊く。

「あ、えと…私の所属している部室にそれなりのダンスがあるんで
すけど、ちよつと邪魔…って言うか、処分に困っていたので、どう
か…」

沙月さんが答えてくれた。

「んで、ダンス運ぶのに人手がいるから豊君も連れてきたの」
絢が続ける。

「なるほど…て、ちよつと待って。そのダンスって部室にあるんだ
よな？」

沙月さんに訊く。

「あ、はい。そうです」

「学校まで車ですら20分はかかるぞ…。その道のりを歩いて…そ
れもダンス担いで行くつもりか？」

ちなみに俺達は、私立の中高一貫校に通っている。通学には公共の
バスを使っているが、大体30分はかかる。

「それなら大丈夫です。祖父が大きめの車を出してくれましたから。
後ろの座席を倒したら、ダンスも入ると思います」

「今日も、さっちゃんのおじいちゃんの手で来たんだよ」

沙月さんと絢の言葉に、下の駐車を覗き込む。

なるほど、10人乗りくらいの車が停まっている。

うーん…ここまでしてもらうと断れないつか申し訳ないな。

「沙月さん、ありがとう。俺も今から準備してくるから、ちょっと待っていてくれ」

部屋に戻って外出用の服に着替える。

ミクは…どうすつかね…。家に留守番させておくのも、ものすごく不安だし…ここは連れていくしかないか。

「わざわざすみません。ご迷惑かけます」

沙月さんのお爺さんは、なんとも平和そうな（失礼だろうか？）お爺さんだった。

「ふおつふおつ。若いもんがそう気にするでないぞい。ほれ、外は暑かるが…はよう車に乗らんかい」

なんか沙月さんの家庭ってほのぼのしてそうだな、と思った。

「そういえば、沙月さんて何部？美術とか？」

車の中で沙月さんに訊く。

「私ですか？剣道ですよ」

ふーん。剣道ねえ…。沙月さんが竹刀持っている姿がイマイチ想像できん。

「拓馬君、知らなかったの！？超有名な期待の新人だよ？」

「拓馬…お前少しは他人の事に関心を持ったらどうだ？」

絢と豊に突っ込まれる。

超有名って事はそこそこ強いのか…。見かけによらないもんだな。

「そ、そんな事より、どうしてミクさんはネギを？」

沙月さんが話をそらすように言う。

ミクの奴、まだ大事そうにネギを抱えてやがる。

「あゝ。本当だ！何々！？珍しいネギか何か？私にも見せて」
絢が身を乗り出すと、ミクは防戦体制。ささつと背中にネギを隠し、
絢からネギを守るうとする。

「えゝ、良いじゃん見せてよゝ」

これこれ…車の中で暴れるでない。

「うむ、着いたぞ。ここで待っておけばよいか？」
学校の裏門に車を横付けする。

「ありがとうございます」

お礼を言っけて降りる。

「沙月さん。案内を頼む」

「はい。こちらです」

歩いていこうとすると、豊に呼び止められた。

「おい、あの二人はどうする」

まだじゃれあってんのか…あいつらは。

「いつまで遊んでんだ！いくぞ！！」

第一楽章 起動 8月3日(木) 01(後書き)

ここまで読まれるとは…

感激です！

次の章から物語は大きく動き出します。

第二楽章 戸惑 8月3日(木) 02(前書き)

さて、ここから物語は新展開…もとい神展開またの名を「都合主義
へと突っ走って行きます!!

主人公すら付いていけないほどのスピードだ!
振り落とされずに付いて来い!!

沙月さんの案内で体育館の方へ向かう。
ちなみにミクと絢は、遊びすぎてくたくたになっている。

俺達がそろそろと裏庭を歩いてみると、声をかけられた。

「おや、夏休み中に訪問とは珍しいね」

花壇の手入れをしていた色黒のおっちゃんである。タンクトップの白シャツに短パンというスタイルだ。

「こんちは」

皆口々に挨拶を返す。

「毎日のお手入れお疲れ様です」

「いやいや、これも仕事の内だよ。君は確か中等部一年生の遅井君だったね?…君たちは二年生の諸君かな?」

おっちゃんが俺達に目を向ける。

そう言えばこのおっちゃん、よく校門前の掃除やら校庭の草むしりやらやってるな。見覚えがある。…つかよく俺達が二年生だった分かったな、このおっちゃん。

俺が不思議に思っていると。

「うーん…君はどこのクラスだったかな?」

ミクに訊いている。

あ、ヤバイかな?部外者校内に連れ込んだじゃいけなかった気がする。

「あー、えと…」

俺がどう助け船を出したものと考えていると、

「…くらす?」

ミクが不思議そうに俺に訊いてくる。

うーん…学校の概念について、教えたいのは山々なんだが…明らかにこのおっちゃんに怪しまれる事になる。

出来るだけ目立ちたくないんだが。
しかし…。

「あ、そうか、ミクちゃん学校に行ったこと無いんだ。知らなくて当然か」

絢が余計な事を言う。

「何！？学校に行ったことが無い？君、本当かね？」
すかさずおっちゃんがミクに突っ込む。

「たく…絢のバカタレ！どうフォローすんだよ…。豊を見る。」

無言で肩をすくめるだけだった。

…万事休すか…

「この子が学校に行ったことが無いと言っつのは本当かね？」
俺達を見回して尋ねる。

「あゝ、はい。色々、事情がありまして…」
必死に言い訳を考えながら答える。

「君はどこに住んでるのかい？」

そう訊かれたミクはおずおずと俺の方を見る。

「君の兄弟かい？」

「あゝ、はい。そんなもんです」

「君、名前は？」

「時川…拓馬…です」

矢継ぎ早に質問されては、上手い言い訳を考える暇さえない。

「時川…時川…ああ！親元を離れて独り暮らししているのは君かい？」

…このおっちゃん、本当になんでも知ってやがるな…。

「この子は初音ミクと言って、彼の義理の妹です。色々事情が立って込んでいて、今まで一度も学校に行ったことが無いんです。それで、一度だけでも学校というものを見せてやりたいと思い、こうし

て連れてきたのですが…まずかったでしょうか？」

ちよ！豊何勝手に話をでっち上げてんだ！あまりにも無理ありすぎるだろ！！

俺が抗議の視線を送るも、”任せろ”とでも言うようにウィンクを返してくる。

何考えてんだあ〜！！

「君、本当に学校に行った事が一度も無いのかい？君たち少年少女には、義務教育というものがあるんだけど、それも知らないのかい？」

「…（こくり）」
おっちゃんの質問攻めに無言で頷くミク。

「学校に行ってみたいと思うかい？学校で勉強してみたいと思うかい？」

「…（こくり）」
ゆっくりと頷くミク。

「…よし！！それなら問題ない。我が校門は学ぶ意思のある者全てに対して開かれている！君も是非、この学び舎で思う存分青春してくれたまえ！！」

がははは…と豪快に笑いながら、ミクの背中をバンバン叩くおっちゃん…。

って、何が”問題ない”だよ！！

問題山積みだろ！！無茶苦茶な！！

俺が口を開こうとするより先に、豊が話し始める。

「しかし、この子には正式な戸籍ありませんし、第一、授業料やその他諸費を払う金銭的余裕も」

「いやいや、皆まで言うな。事情があるのだろう？事情が…」

豊の言葉を途中で遮り、うんうんと一人勝手に頷くおっちゃん。

「大丈夫だ！！特別だ！入学を許可する！！金なんて物は後でどうにでもなる！！学ぼうとする意欲があれば、戸籍なんぞいらんわい。さあさあ、事務室に行つてさっさと手続きを済ませろ」

がっはっは…と裏庭中に響く笑い声をあげる。

つて、手続きを済ませるて…んな無茶苦茶な手続き出来るわけないだろが…何考えてんだ？このおっちゃん…

「俺が案内してやろう。事務室はこっちだ！」

ミクの腕をむんずと掴み、強引に引つ張つて行くおっちゃん。俺達も慌てて追いかける。

結局事務室まで来てしまった…。

「ああ、君！入学手続きの資料を一通り出してくれたまえ」
事務員を呼び止めて資料を持って来させる。

つて何素直に従つてんですか！？事務員さん！そこ何かしら突っ込む所でしょう！！

「このこと…このこと…あとはここだな…君のサインが必要だ。後の必要事項はこちらで埋めておく」

土くれだった手で資料を汚しながら、ミクに指し示していく。

「…あの…理事長…この子は？」

ここでやっとな事務員さんが突っ込んでくれる。

つて…え…？

理事長…！？

この、どっからどー見ても管理人風情の…このおっちゃんが…この学校の理事長&校長なのか…。

豊から話を聞かされた俺と絢は放心状態だ。

豊と沙月さんは知っていたらしい…。

そして、放心しているあつという間に手続きは終わっていた…。

「な、何だったんだ…」

「花壇の世話に戻らなければ!!」と走り去っていくおっちゃん(理事長)を見送りながら、呆然と呟いた。

「さて、僕達もここに来た真の目的に戻るっ」

豊の声で現実に引き戻される。

真の目的…？

ああ、なんかあったな…タンスか…。

今までののがあまりにもインパクトが強すぎて、どうしてもよく感じる。

ええと？

いつの間にか家に帰ってきてました。

タンスもいつの間にかミクの部屋に…。いかん…まだ夢見心地だ…。

ミクは今まで通りネギをいじっているが…事の重大さに気付いているのだろうか？

今更だが、平穩という二文字が遠い所に行ってしまった事を感じ取った一日だった。

ふむ。

ミクの部屋の前で考える。

朝食を作り上げ、ミクを呼んだはいいが、返事がない…。

昨日のようなハプニングは避けたいので、注意深く行動しなければ。

「入るぞー?」

ドアを少しだけ開けて、中を覗き込む。

ミクは布団の上に座り込んで何かしていた。背中を向けているので、何をしているかまでは分からないが。

「ミク?」

背中越しに覗き込む。

独特の刺激臭…。いや、ネギ臭。

ミクが手に握っているネギは、しなしなに萎れていた。

「…」

今にも泣きそうにうつむいているミク。

「ミクがネギを”食べ物”としてではなく、”持ち物”として大切にしているのは、理解できた。」

「ええと?そのネギ…抱いて…寝たのか?」

「…」

こくり、と首を縦に振る。

大切な物…なんだろうな。ミクにとっては。

ふう、と息を吐く。

ミクが手に持っているネギは、丸々一本の代物で、根っこ(球根?)も付いている。これなら…

「ちよつと待つてろ?」

ミクの頭をくしゃくしゃと撫でて、台所に向かう。牛乳パックとペットボトル、どっちが良いかな?

え？何してるかって？見たこと無いか？玉ねぎなんかを水に浸けといたら、その内根つこが出てくるだろ？

加工のしやすさから牛乳パックを選ぶ。

家を飛び出して、向かう先は大家さんの家。確か大家さんの家の裏には畑があつたはず。

チャイムを押す。

「…」

そういや、大家のばーさん耳が遠いんだつた。家賃入れる時も苦労してんだ。

「ご・め・ん・く・だ・さ・い！！」

叫ぶ。

「あ〜？」

しばらく待ってやっと出てくる。

「畑の土を少しもらっても良いですか？」

「ああ〜？」

間の抜けた返事をされるとイラつと来るな…。

「畑の土を少しもらっても良いですか！！」

「ああ〜、よかよ〜」

…分かってんのか？この婆さん…。

まあ良いや。とりあえず許可はもらった。裏へ回って、畑の隅からいくらか土を牛乳パックに入れる。

「ミク…そのネギ、貸せ」

大急ぎで部屋に戻ると、ミクはまだネギを大切そうに抱いていた。

「そのネギ…大切なんだろ？治るかどうかはわからんけど、やってみるから」

手を差し出した俺とネギとを交互に見る。

「…」

おずおずと差し出されたネギを受け取る。それはひもの様にくたくたに萎れていた。

持ってきた牛乳パックのプランターにネギを植える。

くてん

倒れた。

何か支えるやつが要るな。台所に戻って考える。出来るだけ長い棒状の物…。

あった、菜箸だ。でもこれでもまだ短い。菜箸を二本縦にくっ付けて、セロハンテープでぐるぐる巻きにする。

牛乳パックのプランターに挿す。ネギを真っ直ぐ伸ばし、ひもで菜箸と固定する。

不恰好だが、まあ良いだろう。

次は。

さっきは使わなかったペットボトルを手に取る。キャップに、千枚通しでいくつも穴を開ける。

これくらいで良いかな？

試しに水を入れて、逆さまにしてみる。

シャー…

OK、簡易ジョウロ完成。

っと、大切なことを忘れていた。牛乳パックの底の部分にも、千枚通しでいくつかの穴を開ける。

「…ふう…」

とりあえずはこれで良い。簡易プランターをミクの部屋のベランダ

に置く。

「ほれ」

まだ半分くらい水が入っているペットボトルをミクに渡す。

「一日一回水をやること。やりすぎは厳禁な？土が湿るくらいで良いから。分かった？」

「……」

ペットボトルを抱えて頷くミク。

）

家の固定電話に着信が入る。

「もしもし？」

「時川さんのお宅ですか？銀星学園事務の坂口と申します。拓馬さんはいらつしやいますか？」

「あ、はい。俺ですけど」

学校？何の用だろう。

「9月から編入される初音さんの事で、至急お渡ししたい書類があるのですが、今から来ていただいてもよろしいでしょうか」

「あ、はい。分かりました。ミクも連れてきた方がいいですか？」

「いえ、どちらかお一人で結構です」

電話を切って、ミクに声をかける。

「ミク、学校一緒に行くか？」

ミクはベランダに座り込んでプランターを眺めていた。俺の声にひよっこり頭を上げた後、ふるふると頭を振る。

了解……。

「留守番頼むぞ」。誰か来ても出なくて良いからな。あと……」

思い付く限りの注意事項を並べ立てる。
誰かに来てもらって、ミクの相手をしてもらうことも考えた。

豊：ありえない。ミクが危ない。

絢：これもない。ミクがもたない。

沙月さん：連絡手段がない。

龍輔：仕事中。

以上。打つ手なし。

友達付き合い考えないと、とか考えつつ
外に出る。一応施錠する。

俺は通学にはバスを使っている。別に他の通学手段が無いわけでは
ないが、まあ、気分的なものだ。

いや、他意はないぞ？他意は…うん。

しばらくバスを待つ。

時刻は11時過ぎ…。

失敗したな。ちゃんと時間を確認するんだった。舌打ちする。この
炎天下で棒立ちは拷問だ。

待ち焦がれた（文字通り焦げそうだ）バスがくる。ちらりと中を覗
くと、ガラリと空いていた。
よかった、座れそうだ。

早く冷えた空気に当たりたくて、バスに駆け込む。
ふう。

一息を吐

脳内フリーズ。

ヤバいどうしよう…。

つか息が出来ん。

えっと…。

とりあえず、落ち着け俺。

まずは深呼吸だ。

ほら、早く息を吸え…脳ミソ酸欠で…。

ゲホッ…ゴホッゴホッ…。

咳き込む。

…え！？急にどうした？つて？

まあ…なんだ？やっぱり説明しないとダメかね…。

バスの中には乗客は一人しかいなかった。

んでその乗客つてのが、制服着た女の子で…可愛くて、いつも通学の時バスに乗ってて、いつも小説読んでて、たまに小説読みながらクスツとか微笑むのが可愛くて、肩に付くくらいのショートカットで、降りるバス停から推測するに結構頭の良い私立中学に通ってて、満員になるとお年寄りに席譲ってて、優しくて、可愛くて、憧れで、可愛くて…。

はい、すみません。

なんとか落ち着きます。

「大丈夫ですか？」

ブゴフウツ…。

こ、声を掛けられてしまった…。

せつかく落ち着きを取り戻しかけた脳ミソがまたもやパニックる。

なんとか返事をしなければ！

「あ、はい。大丈夫でええ！？」

バス、発進。

しつかり体を支えてなかった俺は、よろめいて…。

ゴツツ…。

尻を座席のひじ掛けで強打する。

「~~~~~」

激痛にうずくまる。

「だ、大丈夫…ですか？」

「ハイ、大丈夫です…」

俺が口からなんとか絞り出した声は、なんとも情けないものだった。

バスから降りると、ゆっくりと校門をくぐる。

気分は最悪。このクソうざい太陽が陰ってしまつくらい、ダークだ…。

あの後、俺はバスの後部座席でひたすら小さくなっていった。
憧れの…夢にまで見たファーストコンタクトが…あれじゃあ…。
いや、そっとしておいてくれ、放っておいてくれ…。

「どうした？若人よ！この世の終わりのような顔をしよって…！」
ふいに背中をバンバン叩かれる。

ああ、管理人のおっちゃん…じゃなくて理事長。あんたは悩みなんて
無さそうだな…。

「えと…どうも」

返す言葉が見つからず、しどろもどろになる。

「はあっはっはっ！！なんとも覇気がないもんだ！
や、吐き気ならありますよ…。」

「どれ、このオヤジに腹あ割って話してみんか…！」

無理やり花壇の縁に座らされる。

「いや、ホントに何でもないので…。事務室に呼ばれていますし
今は一人でいたい。」

「そうか…まあ話せんことなら、無理に話すこともない。悩めるの
も子供のうちだ。大人になったら悩む暇さえない…。」

いままでとは違い、うってかわって静かに話し始める。

「ハツネ…と言ったな、あの娘は元気か？」

「え？あ…はい…まあ」

「あの娘は、今まで他人と関わったことがないのか？」

「え？」

「いや、ふと思ったんだ。あの娘は…なんと言つか…ううむ…なんと言えば良いか…」

理事長は一度言葉を切り、何やら考え始める。

「そう、止まっておるんだ。動いておらん。誰かと関わり、誰かと仲良くなり、誰かと喧嘩をする…そんな当たり前の事を、知らんような気がしてな。まあ、教育者の勘というものだ」

”止まっている”か…。

「そう…ですね」

なんとなく分かる気がした。

「しつかり支えてやれよ！」

例の如く中庭中を振動させる笑い声をあげる。

「どうだ？自分の事ばかり悩んでもおられん事が分かっただろっ？」

あ…。

いつの間にか頭が切り替わっていた。

校門をくぐった時の、あの憂鬱感は小さくなり、潜めていた。

「ありがとうございます」

立ち上がって頭を下げる。

「よかよか、まあ…悩むのも大事だ。だがな、悩んだところでどうにもならんこともある。悩みには二種類あつてな。つまり、”解決する物”と”しない物”だ。どうせ上手く行く事に気を揉む必要はなく。失敗するなら仕方ない…それでも事は進んで行く…。向上心を忘れるな？」

大きく伸びをしながら理事長が教えてくれた。

俺はもう一度深々と頭を下げると、事務室へと急いだ。

「プリントはこれで全部ね。後は…ああ、7日の月曜日に制服の採寸をするから、視聴覚室に来るよう伝えておいて?」

「はい、分かりました」

色々な注意事項やらが書かれたプリントの束を抱えながら、返事をする。

「後は、うん…。夏葉さんが居ないとねえ…」

夏葉さん?事務員の上司か?

等と思っていると、後ろの方から声がした。

「失礼します。二年、高木夏葉です。お呼びでしょうか?」

声に振り向く。

長髪の目付きの鋭い女子が、キビキビとこちらにやって来る。

「夏葉さん、ごめんね。編入手続きの事んだけど…」

何やら書類をめくりながら、話し込んでいる。

つか、本職の事務員が生徒に話聞くなってどうなのよ…。

二年…つつ事は同い年か。

ああ…なんかいたな。こんな感じのいかつい…いや凜々しい女子。

確か生徒会長だった気がする。集会の時とかよく前に立ってるな、うん。

「で、いいのよね。ありがとう、夏葉さん。助かったわ」

「いえ、…それでは」

笑顔でお礼を言う事務員さんにもニコリともせず、足早に去っていく。

やだねえ、ああいう愛想の無い人間。

そんな事を考えていると、すれ違い様にチラリと睨まれた…。

「ただいま」

家に帰りつき、ほっ、と息をつく。

「ミク？」

プリントを手にミクを探す。

いた。ベランダでネギのプリンターを見つめている。

「って、ずっとそうしてたのか？」

思わず訊ねる。

「…」

ミクは無言で頷くと、またプリンターに目を向ける。

やれやれ…。

プリントをミクの脇に置くと、俺は夕食の支度に取り掛かった。

「海だ！」

「遊園地が良い！」

「いや海だ！！」

「ゆ・う・え・ん・ち・が・い・い！！」

「う・み・！！」

「てめえらしい加減黙れええ！！」

机を叩く、ダン！という音で静まり返る。

絢と豊が、明日の日曜日にミクをどこに連れていくかで揉めている。

「遊園地なんていつでも行けるじゃないか。でも海で遊べるのは夏だけなんだ！」

と熱く語るのが豊。

「遊園地の割引券の期限、夏休み一杯だもん！」
と軽く拗ねてるのが絢。

「割引券でいったって、スーパーに置いてある、2000円割引じゃないか。入場料だけで1000円近く取られるんだぞ？アトラクションに乗るとなると」

「豊君は女の子の水着見ただけでしょ！」

「いや、僕はだね、金銭的な問題で」

俺と沙月さんは、一日でも早く宿題を片付けなるべく、奮闘を続けて

いる。

もともとは四人で宿題をしていたんだが、途中から龍輔が遊びに来た。そして明日の日曜にどこかに遊びに行こう、という話になって…こうなった。

「拓馬！」

「さっちゃん！」

「海が良いよな？」

「やっぱり遊園地だよな？」

二人して同意を求めてくる。

「ええ…と、やっぱりミクさんが楽しめる方が…」

沙月さんがミクを見ながら言う。

「…？」

ミクは無言でキョトン顔。

「そうだなあ…後は運転手の意向を聞いた方がいいんじゃないか？」

俺は寝転がって雑誌を読んでいる龍輔に目配せをする。

「ん〜？俺〜？別にどこでも良いけど？」

雑誌から目をあげることなく龍輔が答える。

「は〜い！じゃあ恨みつこ無しの多数決！海がいいか、遊園地がいいか」

絢が手を上げて、皆に呼び掛ける。

「あ、あの…」

沙月さんが遮る。

「遊園地は結構お金がかかるんですよ？」

「そうそう、その点海ならお金はほとんどかからない！暑い中、アトラクションに行列しなくていい！！海の方が楽しいだろ？」

「あ〜…余所行き用の水着、持ってないんですよ…」

「大丈夫！沙月さんならなんでも似合う！なんなら僕が買ってきてもいい！！…いや、競泳水着というのもまた…」

「…でも、ミクさんはどちらかと言えば、きゃいきゃい騒ぐよりものんびり過ごす方が好きそうじゃないですか？だったら動物園なんてどうでしょう？動物園なら入園料以外何もかかりませんし」

「沙月さん！やはり競泳水着で行きましょう！！」

「どうでしょう？」

完璧に豊をスルーしている沙月さん…強い。

そうだな…俺は…。

* 選択肢 *

- 遊園地 -

- 海 -

- 動物園 -

- 家でゆっくりしようぜ -

+ 動物園 +

「動物園が良いんじゃないか？沙月さんの言う通り、ミクには動物園が良い気がする」

ミクが遊園地やら海やらではしゃいでいる姿がどうも想像できん。

「拓馬あ！お前も男だろお！！漢のロマンが分らんのかあ！！」

豊：お前との友情のあり方について考える時が来たな…。

「うん。動物園かあ…色々新しいアトラクションに挑戦したかったんだけど。まあミクちゃんが良いつて言うなら、いいかな」
絢は譲歩してくれるみたいだな。後はミクが…。

「ミク。動物園で良いか？」

「…（コクリ）」

少し思案した後、無言で頷く。

「よし、なら動物園で決まりか。龍輔、動物園まで良いか？」

「おう」

やはり雑誌から目をあげることなく頷いた。

「あ、そうだ豊」

「うん？」

宿題をやりながら豊に訊く。

「ミクはネギが好きなんだが、なんか理由あんのか？」

「ネギ…ねえ…いや、知らん」

「へへ、ネギが好きなの？なんか…渋いね」

絢が顔を上げてミクに目を移す。

「ああ、いや。食べ物として…つつより、持ち物として好きみたいなんだ」

「持ち物…ですか？」

沙月さんも不思議そうな顔をする。

「ああ、なんかずっと抱いていてな…寝てる時も離そうとしないんだ」

「へえ…。あ、じゃあ私が抱き枕作ったげようか！」

「ネギの？」

「そう。ネギの！題して、ミクちゃん特製ネギぐるみ…！」
ネギぐるみ…相変わらず、絢のネーミングはすごい。

絢は裁縫：特にぬいぐるみ作りが趣味だ。よくお手製のマスコット人形なんかを作って、バッグにぶら下げている。これがなかなか女子の間で可愛いと人気らしい。

まあ、男の俺から見ても充分上手い腕前だ。

「ミクちゃん、ネギぐるみ、欲しい？」

「…（コクリ）」

絢を見ながらゆっくりと頷く。

「よし、絢ちゃん頑張っちゃおうよー！！」

腕まくりしながら張り切る絢。

「絢先輩？まずは宿題終わらせましょうね？」

「あう…どしてさっちゃんはせっかく上がったテンションを下げるかなあ」

ぶう、とふくれる絢に沙月さんが微笑む。

「先輩、一度裁縫始めると、他の物何も手につかなくなるじゃないですか」

…この二人の強弱関係が良くわかるな。

「あ、そだ！前から訊きたかったんだけど…」

無理やり話題を変えるように話す絢。

「…ミクちゃんって捨てられてたんだよね？なんで？」

「…さあ…」

豊を見る。

「うーん…多分、だけど。声が出ないから、じゃないか？」

「声が出ないから…ですか？」

「うん、ミクは”歌うためのロボット”だから、それを期待して買ったんなら、声が出ない時点で期待外れって事になるから」

「修理は出来ないんですか？」

沙月さんが心配そうに訊ねる。

「修理代もけっこう洒落にならないと思うよ？」

「それでも酷すぎでしょ？ただ声が出ないだけで…その、捨てる…
なんて」

「はいはい、考えたってしゃーないだろ？今、ミクはここにいる。
それでよし！宿題さっさと終わらせっぞ！！」

正直、ミク本人の前で、この話題はつつけたくない。

ちらり、とミクに目を向ける。

ミクは自分の話題が持ち出されても、一向に気にすることなく、ベ
ランダのネギを見つめていた。

第二楽章 戸惑 8月5日(土) 01(後書き)

最近、豊のキャラが崩れて行く音が…(汗

さて、超重要キャラ、高木夏葉が登場しました。物語中盤から深く関わってくるので、要注意です。(つまりはズーッと先の話)

ちなみにこの物語、高校卒業のその日まで続きます。只今、中二の夏休み…先は遠い。気長に付き合って頂けると幸いです。

「日曜日は中学生以下は入園料半額なんだよ」

チケット売り場のおばちゃんがそう教えてくれた。

「ラッキー！」

絢がガッツポーズをする。

「沙月さん、知ってたの？」

「いえ…私もここに来るのは初めてなので…」

どうやら運が良かったようだ。

「はい、じゃあ生徒証見せてくれるかい？」

「…」「…」

おばちゃんの言葉に凍り付く。

いや…半額だつて分かってたら持ってきてただけど。

「ハハハ…いいいいよ。高校生には見えないからね…はい、半額の400円だ」

「ありがとう…！」

早速フレンドリーに打ち解けている絢。

誰とでもすぐに打ち解けられるのは、絢の得意技だ。

俺もおばちゃんに金を渡してチケットの半券を貰う。ついでにミク
の分も。

「ほれ、なくすなよ？」

「…」

無言でチケットをしげしげと見つめる。

「はい、兄さんは大人料金だね？」

「ああ、はい…」

「1500円だよ」

「なんか無性に損した気分だなあ…」
ゲートをくぐりながら龍輔がぼやく。

「まあまあ…」

苦笑する。

「みんなあゝ来て来て！」

先行していた絢が、掲示板の前で手を振る。

「え〜つとあ…。10時から、ウサギさんにエサをあげよう〜！で…13時から、ライオンさんと触れ合おう〜！…15時から、わんわんワールド〜！…だって」

俺達も後ろから掲示板を覗いてみる。

今日のイベントの一覧が貼り出されていた。

「まだ9時過ぎですけど…どうします？」

沙月さんが腕時計を見ながら皆に訊く。

「ぶらぶら寄り道しながら行けば、丁度良い時間になるんじゃないか？」

「そうだな…って、イベント参加決定!？」

龍輔の言葉に聞き返す。

「そりゃ…ほれ」

「ええ〜とね…ウサちゃんってのはね、こつ…耳が長くて、白くて、モッフモフで…ぴよんぴよんって跳ぶの! 分かる?」

龍輔がアゴでしゃくった先では、絢が両手を頭の上に立てて、ぴよんぴよん跳んでいた。ミクに必死にウサギの特長を教えようとしているらしい。

「…?」

そんな絢を不思議そうに見つめるミク。

「ああああ先輩！！スカート！スカートっ！！」

沙月さん…阿呆な先輩ですまない…幼馴染みとして謝らせてくれ…。

と言うより…俺達…じゃなくて絢（達）、すごく目立っている…主に子供達に…。

それとなく離れておくか…。

「あゝ！！拓馬君達置いてかないでよあゝ！！」

大声で叫びながら駆け寄ってくる…ちくしょう…周りの目が痛いぜ。

その後も、ゾウやらキリンやらとふれあいながら（例外なくエサを与えてきた）ウサギ小屋に向かった。ちなみに一番盛り上がったのは絢だ。

「どんな状況でも楽しめるお前を見習うべきなのかね…」

「ん？何々？」

満面の笑みで聞き返してくる絢。…いや、なんでもない。

「あ、ほら！ミクちゃん、来たよ！！」

絢の指す方向から、制服を着た飼育員さん達が、両手にかごをぶら下げてやってくる。

あらかじめ備え付けられた囲いの中に入ると、一つずつかごを開け始めた。

ちびっこ達から歓声上がる。

白、グレー、茶、それぞれの色が混じりあったやつ、耳が短いやつ、垂れてるやつ…などなど、20匹くらいのウサギが囲いの中を跳び回る。こうして見るとなかなか可愛いな。

「ふむ、拓馬は知らないと思うから教えておくが、ウサギは”匹”ではなく”羽”と数える。恥をかかないように覚えておけよ？」

豊…テメエは可愛くねえな…。

「はい、今日もウサギさん達はみんなを歓迎してるよー！誰かのウサギさん達に朝ごはん食べさせてくれる子はあるかなあ？」
飼育員さんがキャベツを取り出しながら訊く。

「……はいっ！」「」「」

ちびっこ（主に女の子）達が一齐に手を上げる。
そんな中……。

「はいっ！！はぁっいつ！！」

やたらとでけえ子供が手を上げる。

「ほら！さっちゃんも……はぁっいつ！！」

隣にいた沙月さんの手も掴んで、高々と突き上げ、飼育員さんに分かるように手を振る。

お前な……頭を抱える。その時。

「はい！拓馬君も手を上げる！！……飼育員さん！！」

むんずと俺の手を掴み、振り上げる。

いや、ちよつとまてえ！

なんとか手を振りほどこうとするが、ほどけない……。しかも、その動きが逆に飼育員さんの目に留まってしまふ。

「……と……はい！！……その元気な男の子！！」

次々と子供達を指名しながら、最後に俺を指差す。

つて俺え！？

「はぁい、その男の子だよ？……あら、今日はデートだったかな？

一人女の子も連れてきて良いよー！」

……はい？

色々こんがらがってるんですが……。

デート？誰と！？

「ほら、早くしないと、みんな行ってるよー！」

絢が急かす。他の指名された子供達は、囲いの入口の方に向かっていた。

「ほら、さっさと選べよ！」

豊まで小突いて急かしてくる。

ええと…俺は…。

- 選択肢 -

- 絢を誘う -

- 沙月さんを誘う -

- ミクを誘う -

- 豊を誘う -

* ミクを誘う *

もともとミクを楽しめるために来たんだもんな。

そう思い、囲い越しにウサギを興味深そうに眺めていたミクの手を掴む。

「ほら、ミク。行くぞ」

急に手を引っ張られて、つつこけそうになるミクを連れていく。

つか…。

恥ずい…この状況は非常に恥ずい。

子供達が来ているという事は、当然父母兄弟も来ている訳で…。

デートだのなんだのと言われると…なんか無駄に目立ってる気がする

る…。

絢のせいで目立ちまくりだな…覚えとけよ。

「はい、このキャベツをあげてください。他の食べ物…お菓子なんかは絶対にあげないで下さいね?」

飼育員さんに釘を刺される。

他にもウサギの抱き方等を教わり、囲いの中に入る。

わらわらわら…。

人に慣れているようで、すぐに何匹かの…ああ、そうだった、”何羽”かのウサギが寄ってくる。

そんなウサギを蹴らないように、慎重に囲いの隅に移動する。

適当に一羽を見繕う。

元々から隅の方にいた、白ウサギを抱きかかえる。

逃げようとしたが、いかんせん隅にいたせいですぐに捕まえることができた。

右手を腹の下に入れて…左手で尻を支える…っと。

「ほい、そーっと抱けよ?」

ミクに抱かせる。危なっかしい手つきではあるが、何とか抱けた。

「はい、キャベツ」

ミクにキャベツを渡そうとするが、ミクの両手はウサギで塞がっていた。

「…あゝ、そうだな。ミク、とりあえず座ろう。ウサギを膝の上に乗せて? よし、キャベツ」

二人して座り込み、ミクにキャベツを渡す。

「あら、シラユキが抱かれてるなんて珍しい」

飼育員さんがこちらに歩いてくる。

「シラユキ…ですか？」
「そう、その子シラユキって言うんだけど、なかなか気難しい子でね…私たちにも全然なついてくれないのよ…」
肩をすくめながら教えてくれた。

「…ん」

ミクがキャベツを、シラユキの口元に持っていく。

はむ。

シラユキがキャベツに噛みつくのと、すぐにキャベツを遠ざけるミク。
「…いただきます…言わないと…ダメ…」

え…。

横で見ていた俺と飼育員さんは、目が点になる。

「ぶう…」

シラユキがミクの膝の上で、不機嫌そうに小さく鼻を鳴らす。

「ん…」

その音を”いただきます”と読み取ったのか、ミクが再びキャベツを与える。

「ふふふ…」

飼育員さんがシラユキとミクを見比べて微笑む。

「っ…ははは！」

俺も何となく…つい微笑ましくなって、笑い声を上げた。

「不思議な子ですね？」

優しく微笑みながら、飼育員さんは去って行った。

シラユキも器用に固い部分（白くなっている芯の部分）を残すと、もう用は無い、とばかりに、ミクの膝を蹴って去って行った。

「ミクさん…どうでした？」

次のゾーンに向かいながら、沙月さんがミクに訊ねる。

「…温かった」

シラユキを抱いていた手をしげしげと見つめながら、ミクが答える。
「良かったですね」

普段はほとんどしゃべらないミクが、少しずつ会話するようになってくる。今日、連れてきた甲斐があったな…。
そんな事を考えていると携帯のバイブが鳴る。

新着メール

差出人：倉瀬絢

件名：楽しかった？

本文：なし

添付ファイル：1件

添付ファイルには、囲いの外から撮ったのだろう。ミクがシラユキにキャベツを食べさせている写真と、それを横で見ている俺の写メがあった。

絢に目を向けると、無言でウィンクを返してきた。

…ふん。色々と恥ずかしい思いをした事はまあ…許してやらんでも

ない。

俺は絢に見つからないよう、添付ファイルをデータボックスに保存した。

疲れた。

ベンチに崩れ落ちるように座り込む。

この炎天下の中、歩き回るのは予想以上に体力を消費する。

「もー！男の子がだらしない！！」

絢が両手を腰に当て、軽く睨んでくる。

お前な…

言い返そうとするが、その気力すら湧いてこない。

「そろそろ昼食にしますか？」

沙月さんの提案ありがたい。

パンフレットを開く。レストランはどこだろう…。

「ん？お昼にするの？」

「はい、12時過ぎていますから、そろそろ食べないと次のイベントに間に合わなくなりますよ？それに早く食べちゃわないと、傷んでしまいそうですし」

絢と沙月さんの言葉にパンフレットから目を上げる。

二人ともハンドバッグから箱のようなものを取り出していた。

ん？箱？

もしかして…。

「軽食ですけど…絢先輩と一緒に、サンドイッチを作ってきました。

皆さんに足りるか分かりませんが、どうぞ？」

ああ…沙月さん。あなたは天使だ。

頭の上に光輪が、背中に後光がさしてみえる…。

みんなで円卓に座り、沙月さんと絢が作ってくれたサンドイッチに手を伸ばす。

選択肢

- 沙月さんが作ってくれたタマゴサンドに手を伸ばす -

- 絢が作ってくれたハムサンドに手を伸ばす -

- 得体の知れない緑色の具材のサンドに手を伸ばす -

+ 得体の知れない緑色の具材のサンドに手を伸ばす +

「いただきまーす」

適当にサンドを掴み、口に近付ける。

ん？何やら刺激臭が…。

「わー！！それダメそれダメ！ミクちゃんの！！」

絢に慌て止められる。

「ミクの？」

「そう！ミクちゃん専用ネギサンド！」

ネギ…って…おい。

よく見ると確かにネギだ。

「ミクちゃんの大好きなネギを使ったサンドだよ？食べて食べて！」
「…」

不思議そうにサンドを見つめた後。

はむっ。

食べた。

「美味しい？」

皆の視線が注がれる中。

「…（コクリ）」

「やった！」

美味い…のか…？

あまり想像したくない味なんだがな…。

豊と龍輔は…どうしたのかサンドイッチを見つめている。

「あ、あの…何かまずい所ありましたか？もしかして傷んでいます！

？」

「感動だ…」

「ううっ…女の子の手料理…」

「…」

沙月さんが笑顔のまま固まる…。

こいつら…。

頭の痛い昼食となった。

適度に腹を膨らませ、サファリゾーンに入る。

「ライオンさんと触れ合おう、かあ〜。どんなだろうね？食べられちゃったりしないのかな？」

「ガラス越しだったり、柵越しだったりすると思いますよ？」

「そっかあ〜。ミクちゃん、ライオンさん分かる？こっ、おおっき

くてね、がおおーって吠えるんだよ？がおーっ」
両手を頬の横に構えて、ミクに説明する絢。

少し先を歩く女性陣の後を追いつつ、つい思ってしまった。

「絢って本当に精神年齢低いな…」

「何を言うか、拓馬。現代には例を見ないほど貴重な属性を備えているじゃないか」

「豊の言う通り。絢といい、遅井さんといい、お前はもっと自分の置かれている状況に感謝すべきだと思うぞ？」

お前らのその性格がなければ…少しは感謝できるんだがな。

そう思いつつも、前に行く三人を見つめる。

ミクを挟むようにして、右側に絢、左側に沙月さんが歩いている。

ミクは右手を絢と、左手を沙月さんと繋いでいる。

二人がミクに絶え間なく微笑みながら、時には声を出して笑っているのを見て、少しだけミクが妬ましくなる。

でも…。

俺はまだ一度もミクの笑っているところも、微笑んでいるところも見ることがない。

ほとんど口を開くことはなく、

歯を見せて笑うこともなく、

腕を振り回し怒ることもなく、

かといって涙を流すわけでもなく、

感情を表さない少女。

いつか、必ず、皆と一緒に笑える時が来れば…。

そう願わずにはいられなかった。

「はい。三ヶ月前に産まれたばかりのライオンくんです。男の子で名前を募集してまゝです。入退場ゲート近くの掲示板に、専用の用紙を置いてますんで、思い付いた方は記入しちゃって下さ〜い」
飼育員さんに抱かれているライオンの赤ちゃんに周りから黄色い歓声が上がります。

飼育員さんがゆっくりと歩いて、集まっている人たちが順番に頭を撫でられるようにする。

「抱かせてください！」

という声があちこちで上がったが、まだ非常にデリケートなため、ダメだそうだ。

「あ、こっち来たよ！」

絢がライオンの赤ちゃんにゆっくりと手を伸ばす。

「いきなり上から手を伸ばすと、びっくりして怖がっちゃうんで、まずはあごの下あたりから撫でて上げてください」

飼育員さんが教えてくれる。

「わあ、ほんとに可愛い！」

沙月さんに撫でられて、目を細めるライオンの赤ちゃん。

やがてミクの前にもやって来る。

ミクは無言で両手を上げ、

「がお」

と言っ。

…はい？

「がおー」

さつき絢がミクに教えた時のように、両手を頬の横に構えて、赤ちやんの目を真っ直ぐ見つめる。

「みゃあ」

赤ちやんが返事をする。

「がお…」

「うみゃあ」

またしても。

会話して…いる訳はないか。

ミクにも撫でてもらい、ご満悦顔の赤ちやん。

「ミルク、飲ませてみますか？」

「…？」

飼育員さんに言われて首をかしげるミク。

ミルクの入った哺乳瓶をミクに渡す。

それだけで赤ちやんが飼育員さんの腕から身を乗り出し、みゃあみやあと鳴き始める。

やあ

食事がもらえることがわかったのだろう。

しばし哺乳瓶とライオンの赤ちやんを見た後。

「…いただきます」

「みゃああ」

「…はい…」

そっと哺乳瓶を近付けてやる。

つかこの光景さつきも見たな。

苦笑する。

ライオンの赤ちやんは、空中で前足をじたばたさせながら、むさぼるように吸い付いていた。

口元も、ひげも真っ白に染めながら必死にミルクを飲む赤ちゃん。そんな赤ちゃんを、真っ直ぐ見つめているミクが少しだけ表情を和らげた。ように見えた。

「可愛かった」

絢が身を振らせるように歩く。

「ミクさん、今日は大活躍ですね？」

沙月さんも微笑む。

「そうだな、ライオンの赤ちゃんにミルクをやるなんて、滅多に経験できないからな」

頭をポン、と撫でてやる。

「次、ここ入ってみようよ！」

絢が指差す先は。

「唄の森…？」

唄の森、という看板が立てられた建物だった。全面ガラス張りで、植物園と野鳥園を兼ねているようだ。

「サッカーコート二面分、か。けっこう広いな」

ドアを開けて入ってみると、以外と涼しい。空調が整えられているようだ。

「天井高い」

絢の言葉に上を見上げてみると、確かに高い。

「確かに”唄の森”ですね」

沙月さんは静かに目を閉じて、鳥の鳴き声に耳を傾けていた。

森の中が忠実に再現されているようだ。ゆっくりと歩き出す。木にはそれぞれ立て札が立っていて、説明文が書いてある。

それとは別に、所々写真付きの立て札もあり、鳥の名前、写真、鳴き声などが説明してあった。

所々開けた場所に設置してあるベンチで一息いれながら、まったりと歩いて行く。

「のどかですね」

「さっちゃん、知ってる？ マイナスイオンパワーって言うんだよ？」
自慢げに知識を披露する絢。：意味分かって使ってるのか？

「心洗われるな」

「ああ… 下界の迷い事も、バイトの鬱憤も忘れるぜ」

「まあ、確かにリラックスできるな」

深く深呼吸しながらミクを見

あれ？

「おい、ミクは？」

皆に訊く。

「ミクちゃん？… あれ？ 付いてきてない？」

キヨロキヨロと辺りを見回す。

「もしかして」

「迷子か…」

「探してくる！」

今まで来た道を引き返す。

「待って！ みんなで探した方が早いよ！」

「そうですね。私はこちらを探しますので」

「いや」

絢と沙月さんを豊が止める。

「こんだけ広くて視界が悪い中じゃ、バラバラにならない方がいい。

目印になるような物もないから、集合場所も決めにくい。皆で一緒に行こう」

「…うん、分かった」

「了解」

頷く絢達を見てすぐに搜索を開始する。

「おい、ミクどこいった？」

「ミクちゃん」

「ミクさん」

皆で呼び掛けながら歩く。

「ったく…どこほっついてんだか…」

「もうちよつと前かな？」

「ミクさん返事返してくれるでしょうか…」

辺りを見回す…どこにもいない…。

やがて…。

「おー！いたぞ」

龍輔の指差す向こう、少し開けた場所にあるベンチにミクは座っていた。

「おい！ミク！…しんぱ」

走って駆け寄ろうとして、足が止まる。

ミク…。

「どうしたの？ミクちゃんだよね…」

俺の後から付いてきた絢達も、思わず足を止めた。

目の前に広がる…光景に。

ミク…。

上手く言葉が出てこない。

その光景は、
悲しいほどに美しく、
切ないほどに儂く、
神聖なる儀式のようで…。

切り株をかたどった丸いすに座り、左手を緩やかに前へと伸ばした
ミク。

その左手に、両肩に、足元に、ミクの周りには無数の小鳥達が群れ
をなしていた。

そして、左手の人差し指に止まった一羽の小鳥に…

涙を流していた。

たった一滴の涙。
顔を歪ませることはなく、嗚咽を漏らすわけでもなく。
無表情の中に隠された感情。
ミクの心の結晶。

その一滴が、地面に一瞬だけシミをつくる。
一斉に小鳥達が飛び立つ。
その羽音に我に帰る。

「…ミク」

俺の声はかすれていた。

小鳥達に涙していた姿勢から、ゆっくりとこちらに目を移す。

立ち上がり、トテトテと駆け寄ってくる。

「…」

皆、かける言葉を失っていた。

「ミクちゃん…どうして、泣いてたの？」ゆっくりと歩きなが

ら、絢が最初に声を発した。

立ち止まるミク。

皆の視線を受けて、ただ一言呟く。

「知らない…」

「分かんないの？」

うつむいたままのミクの顔を、絢が覗きこむ。

ふるふるとツインテールを揺らす。

「みんな…知らない…」

「何を…ですか？」

そっと髪を撫でながら、沙月さんが訊いた。

「みんな…言ってた。」

太陽の薰りも、

風のざわめきも、

雨の煌めきも、

森の 唄も、

…知らない…って」

小鳥たちの事を言っているのだろうか。

ミクは、動物と意思を通わせる事が出来るのだろうか…。

「気温、湿度…全てが完璧に調整された匣で生まれ、そしてただ死にゆく宿命…か」

豊がガラス越しの空を見上げる。

「でも、外に出れば幸せって訳でもないだろう？天敵だっているし、温室育ちじゃ餌だつてろくに見つけられないんじゃないか？」

俺も龍輔の意見に賛成する。

「だろうな…なんだかんだで、この中にいるのが一番安全じゃないのか？」

「それでも…翔びたいだろう。翼があるのなら、どんな鳥だつて」

「うん…豊君の言う事、分かる気がするよ…」

絢がガラスにコツン、と拳を当てる。

「割るなよ？」

俺と豊で、絢の後ろ姿につっこむ。

「うゆ…分かっているわよ…」

「今、絶対、」誰も見てないなら、小さい穴が開いちゃってもいいよね…」とか考えただろ…」

「うぐ…」

…まさかとは思ったが…凶星か。

「ミク…鳥の気持ちがかんのか？」

隣を歩くミクに訊いてみる。

「…何と…なく」

ぽつり、と呟く。

そっか…。まあ、動物の心が読めるなんて漫画みたいなスキル、そうあるもんでもないが。

「あ、みんな！あれ書いていこっ？」
「あれ？」

皆で退場ゲートに向かう中、絢の指差す先を見る。

「ほら、ライオンの赤ちゃんの名前！考えていこっよ！採用されたら記念品だつて！」

「ああ……」

なんかあったな、そうゆうの。

別に、「レオ」とかで良くね？とか思っってしまう。

「うーん……」

(半ば強引に)鉛筆を持たされ、用紙の前で悩む。
付けるからには、良い名前を付けたい。

まあ、他にセンスの良い人の名前が採用されるだろうが。

鉛筆を走らせ、自宅の住所と”獅子丸”と書いてBOXに入れる。
うむ、我ながら上出来な名前だと思う。

ミク用の紙にも住所を書いてやり、渡す。

「よし！完成！……みんな何て書いた？」
絢が皆に聞いて回る。

ミクは少し考えて、何やら長い名前を書いていた。

「ミクちゃんは？何て書いた？」

「…教えない」

「えー！？教えて！ね？」

「…イヤ……」

「ミクちゃんーん！ーん！」

夕暮れの園内に絢の叫び声がこだました。

第二楽章 戸惑 8月7日(月)

やっぱり休みの日ってのはこうだよなあ…。

クーラーの効いた部屋で、ソファに横になり、テレビを見つつ、菓子とジュースを胃袋に流し込む。

うむ、なんと贅沢で至福な一時だろう…。

…何やら非難するような目で、こっちを見つめるお前!!
別に良いだろ!? 夏休みなんだし、今まで散々非日常を喰らって疲れてるんだ!!

最近は何々あったからなあ…と、床に座ってテレビを眺めているミクに目をやる。

なんだかんで、ミクのいる生活に慣れてしまったが…考えてみれば、ミクが家に来てまだ1週間しか経っていない…。

ま、何にせよ、今日一日くらいはグータラ過ごしたって、生活指導の先生も文句は言わない。

、

と、電話か…。

「はい、時川です」

「銀星学園事務の坂口です。本日10時より、初音さんの制服の採寸を予定していたのですが、まだこちらにみえていないようなので、確認のためお電話差し上げました…」

おそろのおそろの時計を見る。

午前11時ジャスト…。

うむ、完璧に綺麗さっぱり清々しいほどに忘れていた…。
とは言えず。

「すみません。多分道に迷ってるんだと思います。昼過ぎまでには探し出して連れてきます！」

早々に電話を切る。

「ミク！学校行くぞー！！」
しまいこんでいた制服に腕を通す。
何事か、と不思議そうなミクを連れて、ひたすら走る…。

って…バス使うんだから、走りゃいいってもんでもないか…。

結局校門をくぐったのは12時少し前…。
暑い…いや、むしろ”熱い”という表現の方が正しいか…。

事務室に行けば涼める…と言う期待は裏切られ、直接、視聴覚室へ

行って採寸するらしい。

「はぁあ〜っ…っつかれた…」

我ながら情けない声をあげて椅子に倒れこむ。

「こんにちは」

ロボットよりも機械的な響きの挨拶。

あの生徒会長様が、段ボールを抱えて入ってくる。

段ボールの中から、何着かの真新しい制服を取り出し始める生徒会長。

「ああ、何か手伝いませよ…う…か…」

作業していた手を止め、ギロリと睨まれた…。はいはいお呼びじゃありませんね。

やがて制服を出し終わると…。

「…」

面と向かって無言で睨まれる。

えっと…？あ、今度こそ”何か手伝え”というアピールですね…。

そう解釈し、腰を浮かせると。

「貴方は、いつまで、ここに、いる、つもりですか？」

やたらと単語を区切って睨んでくる。

「えーっと？」

とりあえずミクの採寸が終わり次第、帰るつもりなんだが…。

「私は、今から彼女の採寸をするんですが？」

「はぁ…」

んな事は知ってる…何が言いたいんだ？

「採寸をするために、服を脱ぐ必要があるんですが？」

「あ…」

なるほど理解しました。

「んじゃ、外で待つてるから」

ミクにそれだけを伝え、そそくさと退散する。

ふう…。

視聴覚室前の廊下に座り込む。

あの生徒会長様と会話するだけで、汗が引いていくぜ…。代わりに冷や汗かいたが…。

ガチャ。

視聴覚室のドアが開き、生徒会長様が顔を出す。

「そこでは暑いでしょうから、事務室へどうぞ。終わり次第、妹さんも連れてきます」

「あ、ども…」

お礼を言い終える前に、ドアは閉じられた。

今、体から流れている汗の大半は冷や汗である。

事務室でしばらく待っていると、ミクと生徒会長様も帰ってきた。

ミクは片手に制服の入った紙袋を持っている。

「合う制服はあったか？」

俺の問いに無言で頷くミク。

「とりあえず夏服だけをお渡ししています。冬服、体操服に関してはまた後日お渡しします」

「はい。わかりました」

「ありがとだね、夏葉ちゃん…私ちよつと手が離せなくて」

事務員のおばさんが生徒会長様にお礼を言ってるが…この学校の事務室、生徒会長様に頼りすぎじゃないか？

「いえ…お気遣い無く　それと」

くると半回転して、俺達を見る。

「次の金曜日に編入試験を行います。既に入学は内定していますので、内容によって入学を拒否されるような事はありません。あくまでも事務的なものです」

おお…良かった。一瞬テストと聞いたとき焦ったぜ…。

「…が、2学期の成績の評価に影響します。万全を期して臨んでください」

「はい」

「貴方には言っていないかもしれませんが」

…ちなみにミクは俺の後ろにいる。

「試験は9時に開始します。今日のような事が無いように、時間に余裕を持って行動してください」

恐怖の邪眼に睨まれ、とっさに言い繕う。

「あく、すいません。まだこの辺の地理に慣れてないと、こいつ方向音痴なもので　」

バサッ。

何かが落ちる音…続いて。

「う…あ…うっ…く…」

背後からの嗚咽に慌てて振り向く。

ミクが…紙袋を放り出し、頭を抱えてうずくまっていた…。

「ミク!?おいミク!しっかりしろ!!」

「ちよつとちよつと?どうしちゃったの?」
事務員さんも慌てて駆け寄ってくる。

「ああ...いや...う...」

生徒会長様が割って入ってくる。

「初音さん、大丈夫ですか?私の声が聞こえますか? 坂口さん、救急車を!」

「待ってください!」

救急車を呼ばれては困る。

「一時的な発作のようなもので、少ししたら落ち着くから、救急車は呼ばなくて大丈夫です!!」

この前も似たような事が起きたが、すぐに寝息をたて始めた。恐らく今回も...。

いや、さて、ここで眠られても困る。安全な場所までミクを運ぶ事ができない...。

「ミク...立てるか?保健室まで、歩けるか?」

座り込んでしまったミクを立たせようとするが、びくともしない...。ただ嗚咽を漏らすのみだ。

周りを見回す。保健室は無理でも、横になれる場所が...あった!

「すみません、そのソファー借ります!...ミク、立てるか?すぐそこまでだから...」

頼む、立ち上がってくれ、ミク!!

「初音さん...ゆっくり、ゆっくり...深呼吸、出来ますか?」

俺が左を、生徒会長様が右からミクを立たせようとする...が。

「いや...っ...やめて!!」

圧倒的な力で腕を振りほどかれる。
いや、弾き飛ばされた。

「つとと…」
大きくたたたらを踏む。

「やっぱり救急車を呼ぶわ！」

受話器を取る事務員さん。

俺は慌てて駆け寄り、電話をきる。

「大丈夫ですから！！」

ミクはフラフラと立ち上がろうとしていた。

「ミクっ！」

後ろから抱きつくような形で拘束する。

「大丈夫…大丈夫だから、さあ、そのソファーまで…」

耳元で励ましながら何とかソファーまで連れていこうとする…が。

「いや…いやあっ…」

抵抗してなかなか進まない。

それでも少しずつ、一歩ずつ…。

「い…あ……………ま……………すた……………ゆる……………して……………」

力無く呻きながら、何かを伝えようと…。

マスター？許して？

よく意味がわからない…。

「大丈夫…誰も怒ったりしてないから…大丈夫だよ」

何が大丈夫なのかは、自分ですらよく分かっていない…。

「さあ…あと…少しっ！」

よろめきながらソファーまでたどり着く。

「ごめ…な…さい……………ゆ……………ゆるし……………て……………」

「大丈夫だから！…ほら、横になって……………」

ソファーに寝かせる。

「大丈夫だから…」

訳もわからず、ただ”大丈夫”と繰り返す。

やがてミクは、ゆっくりとまぶたを閉じた。

第二楽章 戸惑 & a m p・月%日)* (初音ミク

「へたくソ」

容赦ない言葉と共に飛んできた空のペットボトルは、ポン、と軽やかな音を立て、ミクの額に直撃した。

「だなあ…音程ガツタガタだし？」

「ったくよく、こっちは貯金はたいて買ってんだぜ？最初はこんなんじゃないかったのに、壊れんの早えんだよ」

「とりあえず、区切りついたんなら行こーぜ？」

「…おう」

2人の男は、もはやミクには目もくれようとはせず、出ていった。

バタン。

扉の閉まる音に、肩が震える。シルが一滴、頬を伝う。

「コノオト…キライ」

独り残される。

マスターが帰ってくるまでに、少しでも多く唄う。

マスターが帰ってくるまでに、少しでも多く歌詞を覚える。

マスターが帰ってくるまでに…。

マスターに褒めてもらいたくて…。

マスターに笑って欲しくて…。

マスターに…。

オーバーヒートしたスピーカーを酷使用する。

メインスピーカーは、少し前に壊れてしまった。

マスターには言っていない。

サブスピーカーが残っているから。

さあ、唄おう…。

明日は泣かない。もう泣かない。

このシルを最後にする。

何度自分に誓ったのだろう…。

床に散らばった”譜面”をかき集める。

もっともその譜面には、音階も音程も記されていない。

マスターが、「もっと高く」と言えば、高い声を出す。

「少し高く」と言えば、少し高い声を出す。

ただそれを繰り返す。

いくら練習しても、ミクの歌声は、マスターの望んでいるそれには近付いてはいなかった。

連続起動時間が20時間に近付いていた。

頭の中に警告音が響く。

ゲンカイ レンゾクキドウジカン ガ 19h45m00s ヲ
コエマシタ

スリープモード ヘイコウ シマス

「ダメ!!!」

Administrator 権限を行使する。

練習…しなきゃ。

上手に歌わなきゃ。

マスターに書いてもらった”譜面”を抱き締める。

マスターに…。

約1時間後…誰もいなくなった部屋に、何かが崩れ落ちる音が木霊した。

またしても床に散った紙には…。

「音痴」

というタイトルと…。

あまりにも自嘲的な歌詞が…。

「訊きたい事があるのだけれど」

規則正しい寝息を立てるミクを横目に見ながら、高木さんが声をかけてくる。

ふう、とうとう来るか…何とか上手く誤魔化さなければ…。落ち着け、冷静に答える。

自分に言い聞かせる。

「彼女、制服の試着の際、決して今着ているその服を脱ごうとしなかったのだけど…何故かしら」

一呼吸空けて投げ掛けられた問いは意外な物だった。

「え…？服…ああ」

そう言えば、と思う。絢と沙月さんが服を持って来てくれた時も、着替えない、と言っていたなあ…。

「何か思い当たる節があるの？」
訝しげに見つめられ、慌てて答える。

「いや、俺が、他の服に着替えたらどうだ？って言った時も嫌がってたなあ…と」

まあ、ロボットだし、無理矢理着替えさせる必要もないか、と思っ

てそのままにしていたんだが。

「なんか、思い出の詰まったお気に入りの服らしいですよ？詳しくは恥ずかしかって教えてくれませんでしたけど…」
取り繕うように付け足す。

改めて思うが、この生徒会長と会話するのは、かなり緊張する。
終始嫌な汗が流れる。

「そう…それともう一つ」
「失礼します」

更に生徒会長様が口を開いたとき、事務室に誰かが入ってきた。
とりあえずこれ以上の追求は避けれそうだ…。胸を撫で下ろす。

「中等部一年、遅井沙月です。剣道場の鍵を返却しに来ました」

白い袴(?)姿の沙月さんが入ってくる。

「お疲れ様…部員達の調子はどう?」

「あ、先輩…みんな暑さでやられてますって。剣道場風通し悪すぎです」

「備品で扇風機を3台回してもらえるよう頼んでいるわ。…ごめんなさいね、部活にもあまり顔を出せなくて」

「いえいえ、先輩は生徒会頑張ってください　珍しいですね、時川先輩が高木先輩と一緒にいるなんて」

高木さんと話していた沙月さんが、俺に気付いて話しかけてくる。

「おう……」

「引つ掛かる言い方ね。別に私は彼と一緒にいたくて共に過ごしている訳では無いのだけれど？」

おい……あなたの言い方の方がよっぽど引つ掛かるぞ……。

「まあ、ちとミクがダウンしてな……。ここで休ませてたんだ」
「ミクさんが？……あ、ほんとだ。大丈夫なんですか？」

ソファで横になっているミクに駆け寄りながら訊いてくる。

「分からん」

正直、原因不明である以上、対策のしようがない。

「ミクさくくん……大丈夫ですか？」

沙月さんがそつと呼び掛けると。

「ん……う」

反応があつた！？

「おい！ミク！！大丈夫か！？」

「静かにしなさい……大丈夫なはず無いでしょう？」

慌て呼び掛けるも、高木さんにたしなめられる。

「しばらくは安静にしていなさい。……坂口さん、後期生徒総会の事案の……」

事務員さんと話始める高木さんをよそに、ミクはゆっくりと目を開けて、周りを見渡す。

「ミクさん……気分はどうですか？辛かったり気持ち悪かったりした

ら言ってくださいね？」

屈み込むようにして、ミクと目を合わせる沙月さん…。俺は目を逸らす。…なんでかって？

胸着と言うのは、なんだ、…その…胸ぐりが深いのだよ。それでなくても、汗やら匂いやらで結構ぎりぎりだったりするのだ、理性が。

「あー…、沙月さん？汗冷えするといけないし、早く着替えてきた方が良くと思いますよ？」

「へ！？あ、ああ…。ああああ！！汗くさいですね、すみません！！！」

「いやいや！全っ然臭くなんて無かったからっ！！！」
一度は不思議そうな顔をしたものの、すぐに意味を悟った沙月さんの言葉を、全力で否定する。

「…」

「…」

あ、なんかやつちやった？俺…。

「あは…はは。えと、ありがとう、ごぞいま…す？」

「ああ…いや、どういたしまして…」

「急いで着替えてきますっ！」

大慌てで事務室から出ていく沙月さん。

「鍵、返却しに来たんでした！」

10秒もしない内に戻ってきて、また走り去って行く。

ああ…さっきの言葉は失言…てか、絶対引かれたらうな…。
頭を抱える。

「青春よねえ」

「…」

やたらと細い、生暖かい目でこちらを見る事務員さんと…何より、突き刺さるような高木さんの視線が痛かった。

「ミク、起きれるか？」

恥ずかし紛れにミクを起こす。

「…」

ゆっくりと立ち上がるミクを支える。

「体調が悪いなら無理はしないことね。夏風邪はこじらせると、たちが悪いわよ」

「はい…」

「貴方には、言っていないのだけれど？」
すみません…。

やがて沙月さんが制服に着替えて戻ってきた。
大急ぎで、廊下を全力疾走で。

「中等部…一年、はあ…遅井沙月…です。ふう…失礼…します…」

全身を汗だくにしながら。

「はぁあ…」

ため息。

言わなきゃいけない…。

分かってる。

隠していたらどんどん辛くなる…。

知ってる。

絶対引かれる…。

別に良い。

「あの、せんぱ…い？」

先輩とミクさんの方を振り向く…。

誰もいない…。

あれ？

ええと、確か…。

先輩達と一緒に事務室を出て、
校門を出て。

その後…。

「あー!!」

しまった…。

先輩達はバス通学だった気がする。

そう言えば、途中で二人と別れた気がする。

考え事に必死で、うる覚えだけ…。

うん、確かに先輩達と別れの挨拶を交わした。

電話…で伝えようか…。

スカートのポケットにある携帯電話を掴む。

ううん…やっぱり直接言わなきゃいけないかな。

「あゝあ」

苦笑。

折角切り出そうとしたら、これだもの。

でも、心のどこかで安心していた。

まだ、大丈夫。

拙い言い訳。

破綻寸前の屁理屈。

「よっしー!!」
気合いを入れる。

今から言いに行こう。
今日言えなかったら、明日はもっと辛くなる。

ええっと…。
拓馬先輩の家は…。

頭の中で町内の地図を広げる。

バス停は…うん、こっちだったはず。

それにしても暑いなあ…。
恨めしそうに太陽を見上げながら、道を引き返す。

玄関の前に立つ。

バスの中で涼んでいた時の爽やかさは、とつくの昔に消え失せた。
いや、もともと涼んでいた感覚すら無かった。

同じことを、ぐるぐるぐるぐると考え続けては、同じ結論を反芻する。

駄目だな、私。

それでも。

金属のように硬く重い腕で、チャイムを鳴らす。

「はあくいつ!!」

聞き慣れた女性の声。

え!?

「はいはい?」

勢い良くドアが開く。

「およ? さつちん? どしたの?」

疑問符がたくさん付いた言葉が投げ掛けられるが、それはこちらも同じ事。

「えと... 絢... 先輩? なんで?」

... こんな所に?

と続けそうになって、理解する。

絢先輩はよく拓馬先輩の話をしてくれる。

なんでも幼馴染みらしい。

かなり親しい間柄のように見える。

夏休み、別に... その... 二人きりで同じ屋根の下にいてええと何だっけ!?

「あ... あああああ! すみません!! 別にお二人のお邪魔をする訳では... お邪魔しました失礼しましたっ!!」

とりあえず帰ろう。

「ちよっ…とさっちん！？多分何か勘違い？」

慌てて帰ろうとした所を、絢先輩に思い切り肩を掴まれた。

「とりあえず中に入ろうね？さっちんの力も必要だし！！」

断る暇も与えられず、家の中に連れて行かれる…。

拓馬先輩は、台所で氷枕を準備していた。

「あれ、沙月さん…どうして？」

「あ、あはは…お邪魔します」
家の主に会釈する。

ミクさんはリビングのソファに座っていた。

おでこにシップを貼っている。

「ミクちゃんがねえ、学校で倒れたらしいのよ」

説明を始める絢先輩に、拓馬先輩が割って入る。

「ほい、氷枕…。あと、沙月さんとは学校で一緒だったから、ミクの事は知ってる」

「さんきゅ。およ？そうなの？」

拓馬先輩から氷枕を受けとりながら、絢先輩がこちらに確認を求めてくる。

「え、ええ…倒れた所は見えてないですけど、途中から一緒でした…」

「ふうん…。さあ、ミクちゃん？お熱測りましょうねえ？」

体温計を片手に、絢先輩がミクさんににじり寄る…。

ミクさんは、すぐに拓馬先輩の背中の後ろに待避。

「はいはい逃げない逃げない…熱測るだけだから、痛くないよ？風邪は万病の元…早く直さないかね？」

「あの…」

ミクさんはロボットなんだから、風邪や病気にはならないと思う。そう伝えようとした時、先にミクさんが口を開いた。

「でも、…私…ボーカロイドで」

「デモもストもないの！！病人は絶対安静！！」

絢先輩の反撃は早かった…。

「熱測つたら布団へ直行！！体調が回復するまで外出禁止！！」

（拓馬先輩の背中中）涙目になっているミクさん、そのミクさんを仁王立ちで睨み付ける絢先輩…。

「う…」

半ベそ状態で絢先輩を睨むミクさんに、拓馬先輩が話しかける。

「とりあえず、今日はゆっくり横になっておこうな？」

渋々と それでも絢先輩と一定の距離を取って 自分の部屋へ向かうミクさんと、付き添う形の拓馬先輩。

二人に私と絢先輩も付いて行く。

「そう言えば、どうして絢先輩はここに？」

ふと気になったので、訊いてみる。

「私？これよ…これ！」

玄関先にあった、巨大な細長い包みを持つてくる絢先輩。

「前に頼まれてたやつ。ミクちゃん専用ネギ型抱き枕！その名もネギぐるみ！！」

自分で「じゃーん！！」と言いながら、包みを破く。

「どう？どうよ！！ネギそっくりでしょ？安眠用に、アロマビーズも入ってるのよ、これ！！」

出て来たのは…うん、巨大な長ネギ。

今まで絢先輩と距離を取っていたミクさんが、おずおずと寄ってくる。

「はい。どうぞ」

自分の身長を優に越える抱き枕を受けとる。

ぼん、とミクさんの肩に、拓馬先輩が手を置いた。

ミクさんは、拓馬先輩の顔を見上げた後、絢先輩に、

「…ありがとう…」

ぼそっ、と呟いた。

「はい、どういたしまして」

にっこり微笑みかける絢先輩。

ミクさんの方は、抱き枕をしげしげと見つめた後。

ぶんー！！

「ちょ、ミク！振り回　うぷ」

ぽふっ。

感触を確かめるように振り回した後、ご満悦な顔で、自分の枕元に置いた。

「やっと完成したから、早くミクちゃんに渡そうと思って持ってきたんだけど、二人とも居なくてさあ…お昼過ぎからさっきまで、ずっと待ってたんだよ」

絢先輩は大きく伸びをしながら、事もなげに言う。

お昼過ぎ…って、今はもう6時近くになっている。

「あゝあ…なんか疲れちゃった。寝よ…。　ミクちゃん、一緒に寝よっか？ね？ね？」

振りほどこうと必死なミクさんにお構い無く、絢先輩がミクさんを布団に寝かしつける。

いつの間にか、看病がお昼寝になっている…いや、もともと病気がやないんだから、看病というの

「ほら、さっちゃんも一緒に！」

「え！？」

不意に言葉を投げ掛けられ、固まる。

「私がミクちゃんの右手、さっちはミクちゃんの左手握って、三人でお昼寝しよ？」

この人は…川の字になって寝ようとしても言っのらうか。というより、ここは他人の家なのに…。

勝手知ったる人の家…という事か。

「あのお…」

家の主を探す。

「うん？」

拓馬先輩が声だけで返事を返してきた。

「ミクちゃん寝かせるね」

私が口を開くより早く、絢先輩が割り込む。

「よろしく」

拓馬先輩の返事は軽いものだった…。

制服のまま横になると、シワになっちゃうんだけどなあ…。

それでも絢先輩には逆らえない。

一度ペースを掴まれると、もう逃げようがないのだ。この人からは。

30分位なら良いか…。

ミクさんを挟んで、絢先輩の反対側に横になる。

「さっちは何しに来たの？」

「…ええと」

絢先輩の言葉に、ここに来た理由を思い出す。

いや、忘れてはいなかった…。

ただ、忘れようと必死になっていただけ。

「拓馬君に話すの？」

事情を既に知っている絢先輩が、ぽつり、と呟く。

「…はい…話さないとまずいですから…」

「心配性だね…さっちゃんは…。でも、そう簡単には」

「それでも、何かあってからでは遅いですから。…この前だつて、先輩が無理矢理お風呂に連れて行って」

「いや、だからそう簡単には」

「そういう問題じゃなくて、です!!」

不意に右手に激痛がはしった。

ミクさんと繋いでいる手が、ギリギリと締め上げられてくる。

「…やめ…て」

ミクさんの振り絞るような呻きに、我に返る。

「ごめんね?ごめんね?ミクちゃん…。うるさかったね…ごめん…」

絢先輩が慌てミクさんの頭を撫でて、落ち着かせる。

「ごめんなさい…ミクさん」

私も謝る。

「寝よう寝よう!」

明るく絢先輩が言い繕う。

「…大丈夫。拓馬君なら分かってくれるし、さっちゃんを変な目で見

たりしないよ」

何を根拠に…とは思っても言わない。

第一、部活動で疲れた体は、横になるだけで深い眠りへと誘い。

金曜日に試験か…。

食器を洗いながら、物思いにふける。

ミクに勉強を教えないといけないだろうけど…さて、どう手をつけたものか…。

ミクがどれくらいの知識を持っているか確かめる必要があるが…正直、ミクが全く何も知らなかったら、と思うとゾツとする。しかもその可能性は、十分にある。

「拓馬君…」

「おう!？」

不意に声をかけられる。

絢がリビングに入ってきた。

「どうした?寝るんじゃないのか?」

「二人なら寝たよ…手伝おうか?」

絢が腕まくりしながら寄ってくるが、こちらの仕事も大方片付いた。

「いや、大丈夫。お茶入れるから、ソファにでも座ってくれ」

「ありがと」

ふう、と息をつきながらソファに腰かける絢に、違和感を感じる。

いつもなら、もっと強引というか、うるさいというか…。今の絢はやたらと神妙だ。

「ほい」

仕事を終わらせ、絢に麦茶を渡す。

俺も座りたいところだが、座る場所を見つけれない。非常に座りにくい…そんな緊張感がリビングを支配していた。

「　　ありがと…話、良いかな？」

結局俺は、絢に麦茶を手渡したその場所から一步も動けなかった。

「おう…」

絢の対面に腰かける。

それきり固く口を閉ざし、考え込む絢。

麦茶を胃に流し込みながら、絢が口を開くのを、ただ待つ。

「拓馬君…」

「うん？」

たっぷり間を取ってから、放たれた絢の言葉は思いもよらないものだった。

「さっちゃんの事、どう思う？」

「　　ふぐっ…ゴホッ…ゲホッ…」

思い切りむせかえる。

麦茶を口に含んでいたら大惨事だ。

「何だよ、急にー!」

藪から棒だ…。

「どう…思っつ?」

再度投げ掛けられるその言葉に、俺の頭も少しだけ冷静さを取り戻す。

「いや…どうって…ねえ…」

頭を掻きむしる。

絢の雰囲気から、この話が浮わつた物じゃない、と言っつのは分かる。

でも…。

「うーん…。良い人だと思うよ。しっかりしてるし…いや、でも危なっかしい所もあるかな…」

一つ一つ言葉を選びながら答える。

「…拓馬君は、さっちゃんの味方?」

「は?味方?...よく分かんないんだけど…味方とか、敵とか、あるのか?」

絢の言っつことの要領がつかめずにいた。

「どんな事があっても、さっちゃんの友達?」

こちらの質問には答えず、さらに追及してくる。

「いや、まあ…向こうが俺を友達として見てくれてるんなら、の話だけど…。おい、絢。何が言いた」

「よし…」

すっくと立ち上がる。

「絢？」

何が”よし”なんだか…さっぱり意味がわからん。

「うん！満足満足！！」

そう言っつてウインク一つ。

え！？終わり？

はあああああ？

訳がわからん…。

「さあぁつて…」

体を伸ばしながら時計を見る絢。

時間は既に7時を回って、辺りも暗くなり始めていた。

「…寝直そ」

帰れ！！…とは思っても言えない。

その後、9時前ごろ。

大慌てで、ひたすら頭を下げる沙月さんと、眠い目をこすり続ける絢は帰っていった。

なんだかなあ…。

進まねえ…。

全くもって、進まねえ…。

「夏休みの友」とかいう問題集（俺は絶体友達になんてなりたくねえ）は、全てのページに渡ってほとんど白紙だ。

本当は少しでもミクに勉強を教えてやりたいところだが、当のミクはベランダでネギを見つめている。
暇さえあれば、ベランダでネギとにらめっこしているのだ。

「お〜い、ミク〜?」

シャープペンを放り出してベランダへ向かう。

ガラス戸を開けた瞬間の強烈な熱気…思わず息が詰まる。

「ほら、勉強」

案の定、ネギのプランターと対面していたミクの頭を軽く叩く。

「…お前、熱中症になるぞ?」

灼熱の太陽にさらされ、高温になっているミクの頭をくしゃくしゃに撫でる。

…ロボットは熱中症にはならんか…。オーバーヒートかな。

一人で納得しながら、ミクを部屋の中に入れる。

太陽の恵みで、すっかり白い部分がなくなり、全体が青々と色付い

た長ネギ。

ネギだと言われなければ、元が何だか判らんな、と苦笑する。

さあ、勉強だ…。

机を挟んでミクと対面。

しかし何から始めるか…。

取り合えず数学かな？計算ならロボットが得意そうだし。

「ミク、 $1+1$ は？」

「……………」

おいおいおい…マジで洒落にならんぞ、これは。
頭を抱える。

いつそ清々しく諦めるか？

記憶喪失とでも言えば、すんなり受け入れられるかもしれない。

…いやいやいや、勉強が出来なくてクラスに馴染めなかったり、イジメとかにあつたら大変だ。

までよ…それよりも重大な課題があつた…。

「ミク…お前、もうちょい喋れ」

「…」

無言、これだ。

これを何とかしないと間違いなくイジメられそうなのがする。

「ミク…自己紹介出来るか？」

「…」

「…自分の名前は？」

「……ねみく」

やっと聞こえるか聞こえないかの声で、ぼそりと呟くミク。

いかん、ちょっとイラツときた。

「ミクー！！」

机を両手で叩きながら、身を乗り出す。

「っ！！」

スカートの裾をギュツと掴み、俯くミク。

…肩が小刻みに震えている。

しまった、と後悔する。

冷水を頭からかけられた、とでも表現すれば良いか…我に返る。

脳内にフラッシュバックしたのは、あの日の動物園の出来事。

小鳥達に泣いていた、あの悲しいほどに美しい一コマ。

そうなのだ…ミクは決して暗いわけではなく、むしろ優しい心を持った子なんだ。

まだ俺は、ほとんど（全く？）ミクの事は知らないけど、彼女が心優しい事は、何となく感じる。

…ただ自己主張が弱いだけなんだよな。うん。

「…ミク…急に怒鳴ったりして悪かった」

そつと手を伸ばして、ミクの肩に触れようとした。

刹那、ビクン！！と体を震わせる。

あちゃあ…本格的にまずったかな…。
慌てて手を引つ込めながら思案する。

多分、この子はかなり幼い。
見た目はともかく、ロボットに年齢があるのかは分からないが、まだ幼い女の子を思わせた。

つて、こんな事考えてるのがバレたら、豊達に何言われるか…。

(ミスターロリペドフィン！！)

やーい、とはやし立てる悪友の音が、直に聞こえるようで、思わず苦笑い。

でも、まあ良いか。

もう一度、手を伸ばして…今度は頭を撫でてやる。

「怒鳴ったりしてごめんな？驚かせたかな？」
ミクはまだ震えていたが、先程のように拒絶するような素振りは無かった。

「とりあえずは、意思表示は出来るよな？　嫌なとき、分からないときは、首を横に振る。　良いとき、分かったときは、首を縦に振る。…分かるか？」

優しく、そつと問いかける。

「…(コクリ)」
俯いたまま、ゆっくりと首を縦に振る。

「よし、ならばは何とかなるだろ…。まあ、なるようになれ…。
学校では絢と豊の(あと沙月さんも)力を借りないとな。」

恥ずかしいけど…。
物凄く恥ずかしいけど…。

まともな家族がない俺にとって、初めて家族が出来たようで…
妹が出来たようで…
守りたい、存在が出来たようで…

って俺は何を独白してんだ気持ち悪い。

それでもついつい頬は緩んでしまっ

もう震えもおさまり、今はくすぐったそうに頭を撫でられているミクが可笑しくて。

緩んだ頬を引き締めるためにも。

「考え事したら腹減った。メシ作るぞ！
ミクも手伝ってくれるか？」

彼女は顔を上げて…。

しっかりと、
頷いた。

第二楽章 戸惑 8月10日(木) 01(後書き)

何このベタベタな展開…

歯が浮く

と作者が酷評する…

何で俺が緊張してんだろうな。
テスト受けるのミクなのに。

「失礼します…」
事務室に入る。

「えーと、編入試験、受けに来たんですけど」

時間は午前8時30分過ぎ。同じ轍を踏まないよう、早めに家を出た。

「ああ、はいはい…初音さんね…。うーん…剣道場まで行ってくる？夏葉ちゃん、今剣道場にいるの」

うふ と微笑みながら返してくる、事務員さん…。

本当に大丈夫か、この学校の管理事務は…。
と呟きつつ剣道場に向かう。

中から激しく竹刀がぶつかる音と、掛け声が聞こえる。
今この中に入っていく度胸は、無い。

時間までしばらくブラつくか…。

ミクに学校内を簡単に案内でもしておこう。

と、回れ右した瞬間。

「 のわっ！？で…出た！！」

胸着姿に竹刀を持った高木さんが、目の前に立っていた(いつの間…)。

「 出た 」とは随分失敬ね、人を物の怪や鬼畜の類いに…」

…いや、お化けの方がまだ心臓に優しいぞ…。

「 編入試験ね？ 」

「 はい… 」

歩き出す高木さんの後に付いて行く。

「 ところであなた、漢字は読める？ 」

ロッカールームの様な所に入ると、唐突に尋ねかけられる。

「 まあ、難読漢字とか以外は… 」

「 そう…なら、この部屋のドアの上に、どんな表札が掛かっているか読んでみなさい 」

なんだ、こいつ…いちいちイラストとくるしゃべり方だよな…と思いつつ（決して言わない）ドアの外に出て表札を見る。

【女子更衣室】

失礼しました。

テストについては…割愛！

いや、俺が受けた訳じゃないし、ミクに聞いても生返事しか返ってこないし。

というわけで、帰る。

ふと階段の踊り場、掲示板の前で立ち止まる。
新入生を勧誘する、部活動募集ポスターがまだ貼ってあった。

「ミクは部活入る？」

「？」

首を傾げてくる。

「強制じゃないから、入る必要は無いんだけどな……」
部活云々よりは、まずクラスに馴染まないとな……。

ただ、一つ思い出したのは、豊が言っていた『歌うためのロボット』
という言葉。

音楽なら……吹奏楽部か……。でも歌なら演劇部の方が近いのかな……。
などと考えていると、視界の端に何かが映った。

女子生徒が階段を駆け降りて行ったんだが……。

「あ……」

プリントを落として行っている。

拾い上げ、急いで後を追う……が。

「居ない……」

目の前には長い廊下……。
ほとんど時間は経っていないから、すぐに追い付けるはず……なんだ
が……。

途中、入り込める教室は無いはずだし……。

「幽霊か？……ははは……まさかな」

ミクに問いかけるが、こちらも首を傾げるばかり。

選択肢

気になる

【気にしない】

まあ、良いか。

こっちから探しに行つてすれ違いになるのも面倒だし…。

プリントを目立つ場所に置いておく。

これで探しに戻ったときにも、すぐ分かるだろう。

「さあて…帰ろう」

そう思つた矢先。

「拓馬君く、ミクくちゃああん!!」

呼ぶ声。

…ミクが体を強ばらせる相手は一人しか居ない。

「おひさ〜!!」

息を切らせながら駆け寄ってくる絢。

「おう」

ミクは素早く俺の後ろに退避。

「みいくうちゃああん?」

手をワキワキさせながら回り込もうとする絢から、ミクを保護する。

「やめい…本気で怯えとるぞ…」

この怯えよう…一体絢の奴はミクに何をしたのか…。

「むう…拓馬君達はどうしたの？」

「ん？テストだった」

「テスト！？」

絢の顔が青ざめる。

「そうなのか…拓馬君がついに残念な点数を取ってしまったのか…。

大丈夫！学年が違ってても、私たち友達だから！！」

…ここから、勝手に迷惑な自己完結すんじゃないねえ…。つつか中等部には、追試も留年もねえ…。

「俺じゃねえよ…ミクの編入試験」

「ありゃ…そうだったのか…そりゃ残念」

残念…てお前…。

「そう言うつお前はどつして学校に？」

絢も一緒に昇降口へ向かう。

「私？部活だけど？」

「部活…ね。確か手芸部だったけか？」

「うん、そだよ」

「…部員、居んのか？」

素朴な疑問を口にする。

「しゅ…」

とたんに絢の顔に縦線が入った。

やっぱりな…。手芸部なんてぱつとしないし、第一存在自体知らない生徒が多いと思う。

「…楽しければそれで良いのよ!」
「開き直ったし。」

「大体、夏休みに出てきてまで活動する部活か？」

運動部みたいに、大会やインターハイがある訳じゃなからうに…。

「そりゃあね…。何日か出てこないと、文化祭の部活出展に間に合わないし」

「…文化祭？」

「10月にあるじゃん？」

「まあ、それは知ってるが…。あと2カ月あるぞ？何をする気だ？」

「…まだ秘密」

楽しそうに笑う絢。…変な事企んでなきや良いが。

「私たちのクラスはどんな出し物するんだろうね？」

「さあ…」

出し物は二学期の頭に決めることになっているが。

「俺は劇みたいなので良いかな」

裏方に回れば、適当にサボれるし。という心胆だが。

これが合唱みたいになると、全員参加だから、サボれないんだよな…。

「劇かあ…良いよね!衣装作りとか張り切っちゃうよ!」

「…部活の方はどうすんだよ」

「夏休みフル稼働すれば何とかなるわよ!!」
むん!!とガッツポーズ。

「お前なあ…せつかくの夏休みに、休まなくてどうすんだよ…」
俺の指摘に、両手を腰に当て反論する絢。

「拓馬君、一体何歳!?夏休みに休んでどうすんの!?!」

「いや、そもそも夏休みつてのは休むためのもので」

「お爺ちゃんじゃないんだから、そんなこと言わないの!!」
おいおい…。

「じゃあ、いつ休むんだよ…?」

「死んだら永遠に休めるわよ!!」

物騒な言葉を平然と言う。

「さあ!頑張るぞお!!」

おー!!と拳を突き上げ、廊下をスキップする絢。

…出し物が劇に決まったわけではないんだがな。

そう苦笑しながら帰路についた。

居心地悪い…。

とんでもなく場違いつつつか…。

とにかく早く帰りたい。いや、ゲーセンなら何度も来たことはあるんだ。

だがな…。

この一画だけは…つつつか…。

「拓馬君、こっちはどうかな？」

「お…おう、良いんじゃないか？」

楽しそうに機械を選ぶ絢にも、上の空で返事する。どうしようもなく周りの目が気になるのだ。

「先輩…ミクさん以上に挙動不審ですよ？」

沙月さんの指摘に、

「馴染めないんだよ…こつゆつ所」

半ば泣き言を漏らす。

すると沙月さんは不思議そうに訊いてきた。

「男子生徒同士では来ないんですか？」

「来るわけないし!？」

男衆でプリクラとか見たくない絵面だ…。

「沙月さんはよく来るの?…絢とかはしょつちゆう来てそうだけど」
元気にミクを引っ張り回している絢を流し目に見る。

「うん…私も久しぶりですね。半年くらいご無沙汰しました」

「そうか…とりあえず、沙月さんと絢とミクの3人で写らないか？俺は別のところで暇潰してるから」

早くこの場を立ち去りたいという、俺の切なる願い。

「駄目ですよお？今日はミクさんの思い出作りプロジェクトの、第一回目なんですから」

絢が発案した”ミクの思い出を作ろうプロジェクト”…どう見ても楽しんでいるのは、ミクではなく絢だ。

「さあっちゅん！！拓馬君！！早く早く！！」

頼むから大声出さないでくれええ！！

出来るだけ目立たないようにその場を離れようとする…が。

「逃げちゃダメですよお？」

沙月さんに引きずられる。

…”ドナドナ”ってどんなメロディーだっけ。

誰だこいつ！？

顔、白っ！病人か！？

髪の色も何か違うし！？

目も怪しいぞ…。

うん、全体的にキモいな俺。

自分の顔にドン引きする俺をよそに、絢と沙月さんは「フレームがどう」「だの」「目がどう」「だの盛り上がっている」。

出きあがった写真を眺める。

…病的なまでに色白の”誰か”が写っていた。

夢に出そうだな…。

自分の顔にうなされるとか情けない。

「ミクちゃん、プリ帳持ってる？」

「…ぷりちよう？」

絢の言葉に首をかしげるミク。

「うーん…日記…も持ってない、よね？」

途中から俺に向かって訊ねてくる。

俺は肩をすくめて、持ってないことをアピール。

「では買いに行きましょう！」

弾む口どりでミクの手を引く沙月さん。

思わずため息が出る。

女つてのは良く動く。疲れを知らんのだろうか…。

仲良く手を繋いで、文具店に向かう三人の後を、足取りも重く追う。

疲れた…。

ただ付いて行っただけで、こつも体力を削られるとは、女三人…恐るべし。

ベッドに倒れ込む。まだ昼過ぎだが、なんのやる気も起きん…。

先程から、ミクはずっと綾に買ってもらった手帳を眺めている。「8/13日」の欄に、「ミクちゃん初プリ」というキラキラした文字と四人で写ったプリクラが貼ってあるのだ。

「日記でも書くのか？」
あくび混じりに訊ねると、ミクは手帳から目を離さずに、ゆっくりと頷いた。

自慢じゃないが、俺なら三日も持たん…。
そんな事を考えつつ寝返りをうつ。

「ん…？」
ズボンのポケットの中に入っている何かを引っ張り出す。
「…ああ」
さっき撮ったプリクラだ。

ため息混じりに起き上がり、ゴミ箱に

もう一度だけ盛大にため息をついて、引き出しの奥深くにしまいこんだ。

夢に出てこないことを祈りつつ。

第二楽章 戸惑 8月13日(日) 01(後書き)

この一話を書くのにどれだけ時間かけてるんだ、私は…

坂道を下ると、何とも形容しがたい開放的な景色が広がった。

「う〜み〜!!」

両手を広げ、砂浜を駆けていく絢を、苦笑混じりに見送る。

豊と、”遊園地か海か”で揉めた時は、あんなに海を嫌がっていたのに。

「なんだかんだ言ってたくせに、一番はしゃいでんじやないか…」

「絢先輩ですから」

沙月さんが断言する。

「説得力に溢れる一言だな」

担いで来たビーチパラソル類の荷物を一旦肩から降ろす。

後ろを振り返ると、豊と龍輔、それにミクが駅からよろよろとこつちに向かつて来る。

「大丈夫か〜?」

豊と龍輔が抱えているのは、ビーチバレーセット(かなりの大荷物)。ミクはスイカを丸々一玉抱えている。

電車で海水浴場まで来たが、電車の中でかなり目立つご一行様だった。

「重い…」

げっそりとした表情で、豊が俺達に追い付く。

「取り合えず沙月さん、ミクをよろしく。俺達は場所取りしとくから」

「分かりました。…ミクさん、行きましよう?更衣室はこっちです」

ミクの手を引いて行く沙月さんを見送ってから、ビーチパラソルを立てる場所を探す。

時間はまだ朝8時過ぎだと言うのに、砂浜の半分は他の客が占拠していた。さすが有名な海水浴場だ。

適当な場所に傘を開く。レジャーシートを敷いて、その上に寝転がる。

「…拓馬、寝てばつかだな」

「うるせ」

豊に構わず大きく伸び。

8時にここに着くため、家を出たのは6時過ぎだ。夏休みボケで崩れた生活習慣の俺にとって、この早起きは正直辛い。

女子達が着替えてくるまで一休みしよう。俺は服の下に海パンを履いているので、着替えに時間はかからない。

そう思って目を瞑ったとき。

「おりよ？さっちゃんとミクちゃんは？」

絢が帰ってきた。

「更衣室」

目を閉じたまま答える。

「ひどい！？私を置いてけぼりにして…」

…いや、お前が先に駆け出したただけだろ…。

「ま、いいか…私も着替えよ」

「おう、行ってこい」

レジャーシートを元に戻し、今度こそ横になる。

ちきしょう…。

誰に対してでもなく、毒付く。

「拓馬君、照れてる？」

俺の隣に座る音。

「あほか」

寝返りをうつて、絢に背を向ける。

「やっぱり照れてる」

からかうような口調。無視してやり過ごす。

豊と龍輔の奴、どこ行ったんだ？俺ばかりこんな目に…。

「ねえ、拓馬君、拓馬君」

「あん？」

照れ隠しのつもりが、思った以上に不機嫌な声になった。

「あ…ごめん…」

絢の声が尻すばみに消えていく。

余計に気まずくなる。

…つたく、何だってんだ。

「何だよ？」

途中で止められると非常に気になる。

「いや、まあ…」

珍しく、絢の歯切れが悪い。

「お待たせしました」

丁度、着替え終わった沙月さんとミクがやって来た。

この気まずい空気を打ち消してくれたのはありがたい。

っつ。。

「ミク…なんで学校指定水着なんだ？」
頭痛がする。

「どうだ？似合うだろ？」
いつの間にかやって来た豊が、ニツと笑う。

お前が元凶か、この野郎…。

「沙月さん…ミクの水着、沙月さんに頼みましたよね？」

先日、沙月さんが「よそ行きの水着を買いに行く」と言うので、ミクの分も見繕ってもらったのだ。確か、沙月さんとミクの二人でデパートに買いに行ったはずだが…。

「いえ、ちゃんと”まともな”水着も持ってきているんですが…。
豊さんが水着を持ってきて、ミクさんに”どちらか選べ”と…。」
なるほど。

「そしてミクは、豊が持ってきた物を選んだ、って訳か」
「はい…すみません」
肩を落とす沙月さん。

「いやいや、悪いのは全てこいつであって、沙月さんには非はないから…。」

…と言つより豊。

「お前、この水着どうした？」

素朴な疑問。もしも常日頃から女性用の水着を収集するような趣

味があるなら、真剣にこいつとの付き合い方を考えないといけない。

「うん？もちろん買ったよ？僕が水着泥棒をするように見えるかい？」

「そうか…それなら別に問題は。」

「いやまてお前…。女性用の水着を買うことに抵抗はないのか！？」
すると豊は心底不思議そうに。

「可愛い女の子に、似合う水着を提供するのに、抵抗があるのかい？」

思わず額に手をあてる。

うん、やはりこいつとの友情関係については、真剣に考え直そう。

「そんな顔するなよ。どうだ、似合ってるだろ？」

豊に、ポンと肩を押されたミクが、一歩前が出る。

ミクは小首をかしげて俺を見上げる。

緑のツインテールが不安そうに揺れた。

殺人的だ…。

「…まあ…確かに…似合っては…いる…」

一言一言を絞り出すように認める。

「だろ？ちなみに三人の中で一番可愛いのは、拓馬的に誰？」

「おいおい、本人たちの前で言うのか？どんな罰ゲームだよ」

俺が回答を拒否すると、豊は耳元で。

「…（バスの少女の事、バラすぞ〜）」

こいつ…。

「一番ドキツとしたのは誰かって事だよ。ちなみに僕はミクを推すね」

そう言って高笑い。

まったく仕方ねえ。

ミクと沙月さん、それに絢を順に見回す。

ミクは紺のスク水。

沙月さんは水色のワンピース。

絢はオレンジのタンキニにパレオだ。

皆の視線が俺に集中する。

つて、答え辛え！？

はあ…。何でこんなに緊張するんだよ。

* 選択肢 *

ミク

沙月さん

絢

みんなそれぞれ似合ってる

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 01(後書き)

次話から2話分はルート分岐します

ですので、

ミクルート

絢ルート

沙月ルート

アナザールルート

の四話を同時にアップデートします

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 02 倉瀬彩(前書き)

この小説は、

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 01

の選択肢において

【絢】

を選んだ場合の、物語の続きです

【絢】

まあ、一番ドキッとさせられたのは…。

「絢だな」

「即答だなおい…」

豊が意外そうな顔をする。

「私…?」

一番驚いているのは絢本人だったりする。すっかり放心状態だ。

「そりゃあなあ…さっきのはさすがに俺もドキッとしたね。迷惑なもんだ」

「さっ…きの子?」

徐々に自我を取り戻しつつある絢。

「ああ…別に見せるお前は良くて、見せられるこっちはたまったもんじゃな いゝいゝいゝいゝ!」

途中から悲鳴に変わる。

絢の奴が

思いつきり

俺の素足を

踏んだのだ。

それもサンダルの一番固く尖った所で。

「お前!!」

あまりの激痛に体を折り曲げる。足の指から血が出ている。

「ミクちゃん、さっちゃん、行くよ!!」

「てめえ!!」

一言も謝らず去っていく絢を捕まえようとするが。

「ぐっ!!」

一歩踏み出した瞬間、更なる激痛が襲う。どうやら、歩く事すらままならないらしい。

「絢先輩！拓馬さん、足怪我して」

「ほっとけば!!…行くよ!!」

そう言って、沙月さんとミクを無理矢理引っ張っていく絢。

俺はびっこをひきながら、ビーチパラソルの下に座る。

こりゃひでえ…。

指の皮が完全に抉られている。

「お前…地雷踏んだのか？」

豊が訊いてくるが、そんなもの知らない。

「知るかよ…ったく、あのバカ、謝りもしねえで!!」

謝られたところで許しはしないが。

「ほら、ハンカチ。止血しとけ…病院行くか？」

「おう、さんきゅ…病院は別にいい」

豊から借りたハンカチを傷口に当てながら、水際に下りていった絢を睨みつける。

「今日もミクのために来たんだからな。ミクが今日一日楽しみ尽くすまでは我慢だ」

そつだ、ミクのために耐えてやる。

つたく、あの気違いが。人が氣い使つてやったのにこの仕打ちだ。

絢が着替え始めた時、放っておけば良かったと、心の底から後悔する。

「豊、お前も行ってこい…俺は荷物番してっからよ」

シートの上に横になり、日差しを少しでも和らげようと、顔の上にタオルを掛ける。

豊はぞんざいのため息をついて去っていった。

なんなんだよ、絢の奴。

こんな所来なきや良かった。

ジンジンとする足の痛みと共に、とりとめもない恨み言が沸き上がってくる。

覚えてろよ。

どれくらい恨み言を呟いていただろう。

「拓馬…君…?」

小さな声。絢の声に聞こえたが…。

顔を覆っていたタオルを少しだけずらし、声の主を確認する。

やはり絢だった。

「…何？」

タオルを元に戻しながら、問う。

何を今さら…。

「…」

何やらぼそぼそと言っている。

「ああ!？」

聞こえねえんだよ!

「…」

今度こそ絢は沈黙した。

はああ、女の相手は疲れるねえ…。

大きく息を吐くと、途端に眠気が襲ってきた。

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 02 遅井沙月(前書き)

この小説は、

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 01

の選択肢において

【沙月さん】

を選んだ場合の物語の続きです

【沙月】

一番可愛いのは…まあ。

「沙月さんだな…」

正直言つて、純粹に可愛い。

「へ…え？私…ですか？」

自分の名前が呼ばれるとは思わなかったのか、状況を把握出来ずにいるようだ。

「だよね〜。さっちゃん、スタイル良いし、肌も綺麗だし」

「ふむ、沙月さんの破壊力には拓馬も落ちたか」

絢と豊も納得顔だ。

「絢の水着は見飽きたしな」

豊が肩をすくめて見せる。

「何よ！見飽きたつて。今年用に新しく買ったやつだもん！！」

「買い直す必要があったのかい？去年の水着でも、サイズはぴったしだろ？」

確かに成長してなさそうだな、と心の中で豊に同意する。

「そんな事はありません！ちゃんと育ててます！！…って逃げるな！」

小突こうとした絢から逃げ出す豊。

「ミクちゃん、さっちゃん！追っかけるよー！！」

「ええ！？私もですか？」

…海にまで来て鬼ごっこかい。
俺はビーチパラソルの下でもう一度横になる。

心地よい潮風。

穏やかに続く波音を子守唄に。
惰眠を貪る。

詩的で至福な一時。

ふと先程の光景がフラツシユバツクする。

薄い水色のワンピースの水着。

消え去れ邪念。

真っ白な肌。

失せる煩惱。

清楚な…いや綺麗な…違う神秘的な？

そんなオーラすら感じた。

「沙月さん…か」

呟く。

「はい!？」

予想外の返事に、心臓が二回宙返りを決める。

「…え!？って沙月さん…いつからそこに!？」

いつの間にか沙月さんが、隣に座っていた。

「少し前からです…拓馬さんが気持ち良さそうに眠っておられましたので…」

「そう…。ミクと絢は…あそこか」

ミクと絢と豊は水際で遊んでいるのが見えた。

「で、あの…何か？」

「いや、沙月さんは遊ばなくて良いの？荷物なら俺が見とくけど上手く誤魔化す。」

「私は大丈夫です…日に焼けたくありませんし」「ふーん…」

沙月さんに言われ、改めて肌の白さを実感する。水着から覗かせている脚といい、腕といい、透き通るように白く、細い。

「あ、あの…」

スカートの裾を伸ばし、俺の視線から足を隠そうとする。

「あ…！すまん…！」

慌てて顔を背ける。

何やってんだ俺は…。

どうやら見とれていたらしい。

いや、しかし、恥ずかしがる沙月さんの顔も、なかなか可愛

仏説摩訶般若波羅蜜多心經…。

あの白さは違反だよなあ。

ふっせつまかはんにやはらみったしんきよう…。

汗ばんだ肌、濡れた髪。

ふっへふまはんなはらひっはひんほー…。

ああ、神様。
どうかこの俺に。
穢れなき心を…。

周りの美しい風景を楽しみ、邪念を振り払う。

…カップルが多いな。

男と女が白昼堂々、手なんぞ繋ぎよつてからに…。

ああゆう連中は、痴話喧嘩で別れてしまえ。…別に羨ましいなどとは思わない。

見る、女同士で遊んでるやつら…は置いといて、男同士で群れるやつらだって、こんなにあくさんいるんだ！

俺は多数派だ！！

萎れかけたプライドをなんとか支える。

…しかし、男共とよく目が合う。

俺が人間観察をしているせいだろうか…。

また目が合った。

何だろう…俺の顔に何か付いてるんだらうか。

自分の周りを見回して、気付いた。

男共が見ているのは俺ではなくて、沙月さんだ。

当の沙月さんは、膝を抱えて俯いている。

憂いをおびたようなその表情でも、人の目を奪う程の美しさ…儂さ?…言葉に出来ない”何か”を放っていた。

同じ傘の下いるとはいえ、俺と沙月さんとの距離は遠い。周りから見ても、恋人同士には見えない距離だろう。

少し近付いてみようか。

そして周りの男共に見せつけてやろうか。

俺の…。

俺の後輩は、こんなに可愛いんだぞ。と。

周りの連中が、俺達をどう見るかは知ったこっちゃない。

あいつらみたいに手を繋ぐ訳じゃない。

ほんの少し近付くだけ。

周りが俺達を、恋人同士だと思うなら、別にそれで良い。

いちいち誤解を解いてまわる必要はない。

ほんの少しだけ、腰を浮かし、そっと近付く。

ちらりと横目で沙月さんを盗み見る。

「…はあ」

彼女を小さくため息をついて。

俺から離れた場所に座り直した。

とたんに、自分の中で熱くなっていた感情が急速に萎んでいく。後に残ったのは、暗く、冷たい、”何か”。

…俺は何を考えていたんだろう。

彼女を自分の誇示のために使おうとしていたのだろうか。

もちろん、彼女が離れた場所に座り直したのは偶然かもしれない。気まぐれかもしれない。

だけども今。

彼女にもう一度近付いてみようという勇氣は。

俺には無かった。

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 02 初音ミク(前書き)

この小説は、

【ミク】

を選んだ場合の物語の続きです

【ミク】

「誰が一番似合っているか…と聞かれれば、まあ…ミクだな」
決して深い意味はない。誤解しないでほしい。言葉通りの意味しかない。それ以上でも以下でもない。

「やはり拓馬も”その道”の男だったと言っわけか」
「お前と一緒にすんじゃねえ!？」

「まあ、私たちから見ても、ミクちゃんの水着は凶悪だもんねえ…」
「ええ、そうですね…」
絢と沙月さんからも似合っていると言われ、少しご満悦なミクだった。

200

暑い…。

ビーチパラソルの日陰にいるものの、尋常もなく暑い。

女子たちは浜辺で水遊び。

龍輔は埠頭で釣り。

豊は放浪、恐らくナンパ…。

俺はこれと言ってやる事もないので、寝て って何だよその視線。眠いんだから仕方ないだろう。

不意に隣で音がした。

見るとミクと絢が、鞆の中を何やら漁っている。

「え〜と…あった！！これが浮き輪」

どうやらミクは泳げないらしい。と、それもそうか。ロボットだし、常識外の重量だし。

「はい」

絢が、取り出したペチャンコの浮き輪を俺に差し出す。

…膨らませろ、と？

仕方ない。

5分の格闘の末、何とか浮き輪が完成する。

「あ〜…」

体力を使い果たして、大の字に寝転がる。

「な〜に情けない声出してるの…。ほら、拓馬君も行こ？」

「ちよつと休ませて…」

「今までさんざん寝てたでしょ？」

「あと少し〜」

「もう…。ミクちゃん行こ？さっちん待ってるし」

しかしミクは、イヤイヤと首を振り、俺の横に腰を降ろす。

どうやら俺が来ない限り、自分も行かない事に決めたらしい。

絢は不機嫌な表情で見下ろす。

「拓馬君〜」

こつなると俺が悪者だ。

「あ、やっぱり寝てて良いよ」

何か思い付いたように手を打つ。

「ミクちゃん…一緒に拓馬君を埋めようか!」

まてまてまて…。

この暑さの中、そんな事をやられたら蒸し焼きだ。

「分かった分かった…ほら、行くぞ」

立ち上がり、ミクの手を引く。

「あちつ!!あつつ!!」

砂浜は灼熱の熱さだ。爪先走りで海までダッシュする。

足首まで海に浸かり、ようやく一息つく。

「大丈夫ですか?サンダル持ってきてなかったんですね」

「おう、沙月さんか…。サンダル持ってくるって言う発想は無かったなあ」

今さら後悔しても遅い。

「あ、拓馬君、見て見て」

絢が一つの貝殻を持って来た。

「ミクちゃんが見つけたの。綺麗でしょ」まるで自分が見つけたかのように自慢する。

なるほど、確かに綺麗だな。

大きさは手のひらにすっぽり入るくらい。

色はピンク…光の加

減で虹色に輝いている。

「へえ…何貝だろ…」

絢に返す。

「ミク貝？」

「先輩、それを言うならミル貝…」

「はい、ミクちゃんの」

絢と沙月さんが微笑みながら、ミクに貝殻を手渡す。

「確か、海の家の際に、お土産屋さんがあつたよね…。その店員さんに、何の貝か訊いたら分かるんじゃないかな？」

絢の指す先、こじんまりとしたお店に目を向ける。

あそこか…。

「まあ、帰りに寄ってみようぜ」

大切そうに貝殻をしまうミク。

さて、何して遊ぼうか。

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 02-b(前書き)

この小説は、

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 02-b
にて、

【みんなそれぞれ似合っている】
を選んだ場合の物語の続きです

【みんなそれぞれ似合っている】

「うん、みんなそれぞれ似合ってるんじゃないか？」
ナンバーワンじゃない、オンリーワンだ。
と、誰かが言っていた。

どうよ？俺の模範回答。

しかし…。

皆の視線は一樣に冷たかった。

「期待したのに…」

「先輩… かつこよく決めつつもり… ですか？」

「…」

「拓馬、お前という男はっ！！」

え？何よ、この空気。

「拓馬君の甲斐性無し！！」

「先輩… 軽いです…」

「拓馬… お前はたった今、全世界の男性と女性を… つまりは全人類を敵にしたっ！！」

「… ダボ…」

ミクまで！？

って、ミク！

どこで”ダボ”なんて言葉覚えたの！？

ちょっと、みんな？！？

- B A D E N D -

第二楽章 戸惑 8月15日(火) 02 - b (後書き)

欲張りすぎちゃ、ダメですよ？

第二章 戸惑 8月15日(火) 03 倉瀬彩(前書き)

倉瀬彩編二話目

なんなのよ…もう！

「先輩！マズイですって…拓馬先輩、血が出てましたよ!？」

「良いのよ、ほっとけば!！」

波打ち際まで、さっちゃんとミクちゃんを引きずるようについで連れてくる。

「先 輩!！」

振り払われる。

「らしくないですよ…」

心配そうに私を見つめるその瞳に、苛立ちが募る。

「何よ…」

なんなのよ…。

知りもしないくせに…。

私の事なんか…。

私の事なんか…。

「ほっといてよ!!！」

突然の大声に、周りの視線が集中した。

「ほっといてって…ここまで引っ張ってきたのは、絢先輩じゃないですか？」

さっちゃんの口調からも、苛立ちを感じ取れた。

あゝあ…何やってんだろ…私。

「ミクちゃんが、可哀想です…。早くみんなで遊べるようにしてください。…行きましよう？ミクさん」

さっちゃんは突き放すように言い、ミクちゃんの手を引いて立ち去ろうとする。

それでもミクちゃんは、さっちゃんと一緒に行こうとせず、私に近付いて手を伸ばした。

「…？」

何だろ…私の頬を指でなぞる。

え！？

あれ…。

…おかしいな…。

何泣いてんだろ、私。バカみたい。

今までなら、拓馬君にあんなこと言われたって、お互い冗談で笑い飛ばしてきたのに。

そう、分かってる。

拓馬君が言ったのは冗談だって。

分かってる…けど。

でも…。

よし!!

自分に喝を入れる。

解決した後でゆっくり悩もう。

約束、したもんね。拓馬君？

—— っ、約束したもんね。

「ミクさんに心配かけてるようでは、まだまだですよ？先輩？」

さっちゃんが背中を押してくれる。

「うん、ちよっくら拓馬君と仲直りして来るであります！」

自分の中のもやもやを吹き飛ばそうと、おどけたように敬礼して見せる。

「ミクちゃん？誰かと喧嘩したら、”ごめんなさい”って言うんだよ？」

「けんか…？ごめんなさい…？」

ありゃ、ミクちゃんはまだ喧嘩もしたことがないのかな？

まあ、誰かと仲良くなれば、一度は通る道だろう。

「絢先輩が拓馬先輩を連れてくるまで、私たちは綺麗な貝殻探しましよう？」

さっちゃんがミクちゃんの手を引いて連れていく。

私も拓馬君の元へ向かう。

ここに来て怖じ気づくとは…。
まあ、今までののが全て空気がだった、と言ってしまえばそれまでだが…。

顔にタオルが掛けてあるので、拓馬君の表情が読めない。起きているのか寝ているのかさえ分からない。

「拓…馬君？」
おそろおそろ声をかけてみる。

しばらくの沈黙の後、緩慢な動作でタオルがずさられた。

拓馬君は右目だけを覗かせる。

「…何？」
かなり怒ってる声だ。
ちらりとハンカチの巻かれた足を見ると、それと分かるほどに血がにじんでいた。

「あの…ごめん…なさい…」
申し訳なさで一杯になる。声がかすれて上手く話せない。

「…ああ!？」
返ってきたのは、更に怒りに満ちた声。

胸の奥から熱いものが込み上げてきた。

拓馬君の顔は再びタオルに隠されてしまった。

「拓馬君……?」

もう一度、震える声で、それでもまはっきりと……呼ぶ。

……。

……。

返事く……。……。

第二章 戸惑 8月15日(火) 03 遅田沙月(前書き)

遅田沙月編三話目

『もし、大事な人に何か隠し事してて、でもそれを知ったら、相手を怒らせちゃったり嫌われたりするかもしれない事だったら…先輩ならどうします?』

答えは知ってる。

それでも私は訊ねた。

確信を得るために。

彼に…皆に…打ち明ける勇気を得るために。

だけど。

帰ってきた言葉は、私の予想を裏切るものだった。

『隠し事は…良くないと思うよ。隠し事をする方も、隠し事をされり方も辛いから。でも…』

一言区切って、私の目を見据えて、教えてくれた。

『…隠し通した方が良い事もある。そうすれば相手を傷付けないで済むなら。最後まで隠し通す苦しさど、向き合わなくちゃいけない』

もし嘘をつくなら、それくらいの覚悟が必要だよ。

覚悟は…ある。

何だつて出来る。

——事に比べたら。

何も怖くない。

絶対にバレない自信がある。

でも…。

今になって、それは私の胸を締め付ける。

近付き過ぎた。

解つてたはずなのに。

”誰とも仲良くならない”

そう決めたはずなのに。

簡単にガードが外された。

まさか絢先輩が、ここまで強引だとは思わなかった。

「…沙月さん」

呼ぶ声。

私の意識が急速に引き戻される。

「はい!?!」

拓馬さんだった。

慌てて返事する。

「…え!?!つて沙月さん…いつからそこに!?!」

拓馬さんの方も何やら慌てている。

「少し前からです…拓馬さんが気持ち良さそうに眠っておられまし

たので…」

絢先輩に無理矢理引っ張り出されたものの、日焼けしたくないので帰ってきたのだ。

それなら、初めから海水浴など来なければ良いのだが、やはり絢先輩に無理矢理引っ張り出された。

「で、あの…何か？」

拓馬さんに話さないといけない事がある。…それでもまだ、切り出すきっかけが見つからない。思い切りが付けられない。

「いや、沙月さんは遊ばなくて良いの？荷物なら俺が見とくけど」

「私は大丈夫です…日に焼けたくありませんし」

日焼けは厳禁。何度もそう聞かされた。

「ふん…」

まじまじと肌を見られると、かなり恥ずかしい。先程、拓馬先輩に指命されたのだったそうだ。

私なんかより、絢先輩やミクさんの方がよっぽど魅力がある。

水着を買うときだって、一番肌の露出が少ないのを選んだ。…まあ、日焼けしたくないのが一番の理由だが。

いけない、妙な思考パターンに陥った。

とりあえず、拓馬先輩にいい加減切り出さないといけない。

解ってはいるが…。

最初は何と声をかけたら良いだろう…。
それすら分からない。

” 良い天気ですね？ ”

… バカな。

” 先輩こそ遊びに行ったらどうですか？ ”

… 話したいのに、追い出してどうする。

” 絢先輩達はどこ行ったんでしょ？ ”

… すぐその波打ち際で遊んでいるのが見える。

「 はあ… 」

盛大にため息をついた。

今日は駄目だ… 変に意識してしまった。

こんな顔、拓馬先輩には見せられない。

拓馬先輩から見えないように、そっと座る位置を変えた。

第二章 戸惑 8月15日(火) 03 初音ミク(前書き)

初音ミク編三話目

手のひらで貝殻を転がす。

確かな感触。

光の加減で色を変える光沢。

うん、良い拾い物をした。

ネギの次にお気に入る いや…この前、絢と沙月に買って貰った手帳が二番目だ。

三番目の宝物。

何かくすぐつたいな。

私の手を無理矢理引っ張って行く、絢も。

いつもニコニコ微笑んでいる、沙月も。

時折見せる、豊の真剣な表情も。

私の頭を優しく撫でてくれる、拓馬も。

空気が入った、丸いチューブを渡された。

浮き輪というらしく、何でも浮力を高めるものらしい。確か、海水自体にもいくらかの浮力があつたはずだ。

絢と沙月に連れられて、腰まで水に浸かる。

言われるままに、足を離してみるが…。

あつという間に沈んだ…。

どうやら、この程度の浮力では私の重量を支えるほどには至らないようだ。

私がゆっくりと海水から顔を出すと、絢と沙月は爆笑していた。

なんか悔しい。

あの顔は、私には出来ない。

目を三日月型に。

口元を引き上げて。

駄目だ、顔のパーツが思うように動かない。

仕方ないので、手で動かす。

両手で自分の頬の部分を引っ張り上げる。

伸びた。

目元を変えるには、追加で手が二本必要なので、諦める。

私の顔を見て、絢と沙月が更に笑った。

ますます悔しい。

さて、困った…ライブラリが参照できな。

頭部に衝撃。思考演算を一時中断。

何…？

私にぶつかって跳ね返ったそれは、球状の何か。

飛んできた方向を見ると、拓馬と豊が手招きしながら何やら叫んでいる。

”ビーチバレー”と言うのをするらしい。

要はこの球を誰かの頭にぶつけければ良いのだろう。

絢と沙月に手を引かれ、砂浜へ戻る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4532o/>

初音ミクの崩壊

2011年11月6日02時05分発行